ラテン語文法

鳥瞰図

改訂二版

＜目次＞

I 概説
- i 本書の目的 …… 3
- ii 歴史と文字 …… 3
- iii 発音とアクセント …… 4
- iv 品詞 …… 5
- v 語順 …… 5

II 名詞と形容詞 （前編）
- i 性・数・格の概念 …… 5
- ii 第 1 変化と第 2 変化、第 1・第 2 変化 …… 6
- iii 第 3 変化 …… 9
- iv 第 4 変化と第 5 変化 …… 12
- v 名詞・形容詞の変化のまとめ …… 13

III 動詞 （前編）
- i 活用の概要 …… 14
- ii 直説法現在・過去・未来（能動態） …… 16
- iii 直説法現在完了・過去完了・未来完了（能動態） …… 17
- iv 直説法現在・過去・未来（受動態） …… 19
- v 直説法現在完了・過去完了・未来完了（受動態） …… 20
- vi デーポーネンティア …… 20

IV 前置詞 …… 21

V 接続詞・間投詞・副詞 …… 21

VI 代名詞
- i 概要 …… 21
- ii 人称代名詞と再帰代名詞 …… 22
- iii 関係代名詞 …… 23
- iv 疑問代名詞、疑問文 …… 24
- v 指示代名詞・強意代名詞・不定代名詞 …… 26
- vi 代名詞的形容詞 …… 30

VII 名詞と形容詞 （後編）
- i 格の用法 …… 31
- ii 比較級と最上級 …… 33
- iii 数詞 …… 34

VIII 動詞 （後編）
- i 命令法 …… 38
- ii 不定法 …… 39
- iii 分詞 …… 40
- iv 動名詞と動形容詞 …… 41
- v スピーヌム …… 42
- vi 接続法 …… 43

IX 補遺
- i 叙述同格と絶対奪格構文 …… 46
- ii 英語の文法用語 …… 47
- iii ローマ人の名前 …… 49
- iv ギリシア語系の名詞 …… 50
- v 活用形の一部を欠く動詞・不規則変化動詞・不規則変化名詞 …… 50
- vi 参考文献 …… 53
- vii 変化・活用表 …… 54
- viii あとがき …… 70

Ⅰ 概説

I-i 本書の目的

本書は、「ラテン語に興味がある」という人向けに、文法全体を「俯瞰」するものとして書かれたものだ。

ラテン語文法の「初級」文法書は、わりと難しい。そして、ラテン語を全く知らない段階では、どの文法書が自分に合った文法書なのかはなかなか分からない。そこで、ちゃんとした「初級」文法書を読む前に、ある程度の知識をもっていたほうがいいだろうと考えた。でも本書だけで終わる人のことも考えて、わりと細かいことまで書いてある。分量もわりと多くなった。

本書は、ラテン語を「読む（訳す）」ことを主眼においており、「書く」ことまでできるようになるようなものではない。「書く」ことができるようになるためには、ある程度の勉強が必要だろう。しかし現代、ラテン語を書く機会はめったにない。とりあえず読めればよいのではないだろうか。そしてラテン語のしくみを知ることが大事だ。私は、外国語学習が「英語→ラテン語→他の西欧言語」の順に行われるのが理想的だと思っている。ラテン語の知識を持っていれば、フランス語・スペイン語・イタリア語の理解がスムーズになる。

本書は、（通常の「教科書」のように）多くの分野をを少しずつ並行的にやっていくようには作られていない。品詞ごとにじっくり解説して、最後まで読んではじめて全体を概観できるように作ってある。よって、一つ一つの表を暗記するのは後でよい（あくまで体系性を重視しており、重要なことから順番に書いてあるとは限らないので）。とりあえずなるべく速く一周を読み終え、それから重要な部分からゆっくりと覚えてもらいたい。

本書は英語文法（高校 2 年程度）を学習した人向けに解説しているので、そこまで英語を学習していない人には少し難しい部分もあるかもしれない。それでもなるべく分かりやすくするようには心がけた。なお、分かりやすさを重視して英語における例や似ている表現などを紹介している箇所がいくつかあるが、英語は本来ゲルマン語起源であってラテン語起源ではないということ（そして私は言語学者でもなんでもないということ）を、ここに注釈しておく（ただし嘘をついているわけではない。例えば「こういう表現は英語にもある」とか「英語文法で言うと～である」とかというのは、必ずしも「ラテン語起源」の表現が英語に残っているという意味ではなく、単に似ている表現があるという意味である。そこを勘違いしないよう願う）。

と、ここまでが初版のコメントだったのだが、初版を読んだ方々からは「難しい」と言われた。確かに、初めてラテン語を勉強する人が見たら、分かりにくいかもしれないなあと反省した。しかし改訂二版の時点ではまだその点をほぼ直せていない。もし理解できないようなら、分からない部分について図書館で文法書を読んでみるとか、誰かに講義を依頼して本書をレジュメとして利用していただくとかすると、よいかもしれない。また、今回の改訂で誤字訂正も行ったが、さらなる誤字や誤情報があれば、どんどん著者まで知らせていただきたい。

I-ii 歴史と文字

ラテン語はもともと、ローマ周辺（ラティウム地方）の一方言にすぎなかった。B.C.753 年に建国されたとされる都市国家ローマは、B.C.509 年に共和政を樹立した。B.C.272 年にイタリア半島を統一、B.C.264～B.C.146 のポエニ戦争でカルタゴを滅ぼし、B.C.146 にはギリシアを征服し、B.C.133 には小アジアを属州にした。その後、第一回三頭政治、第二回三頭政治を経て、帝政時代に入った。A.D.96～180 年は五賢帝時代と呼ばれ、ローマが最も繁栄した時期であり、五賢帝二人目のトラヤヌス帝の時にローマは最大領土を実現した。北はイギリス・フランス・ウィーン、東はシリア・パレスティナ、南はエジプト・モロッコ、西はイベリア半島までがすべて帝国領だったのである。そして帝国の公用語はラテン語であった。こうしてラテン語はヨーロッパの共通語としての地位を獲得したのである。その後いろいろあって、395 年にローマ帝国は東西に分裂した。西ローマ帝国（首都：ローマ）は 476 年に滅亡。東ローマ帝国（別名：ビザンツ帝国、首都：コンスタンティノープル（現：イスタンブル））は 1453 年まで存続した。

さて、これから学習しようとしているのは（日本の大学などで一般的に教えられるのは）通称「古典ラテン語」

と呼ばれている紀元前後 1 世紀ごろのラテン語の「文語」で、これは行政や文学などで使われていたものである。これが崩れた「口語」は、通称「俗ラテン語」と呼ばれる。これが帝国の属州中の話し言葉として広がり、時代が経つにつれて地方ごとに崩れていった。そしてローマ帝国の解体も相まって、それぞれが別の言語になってしまった。それが現在のフランス語・イタリア語・スペイン語など「ロマンス語」と呼ばれている言語たちである。またラテン語は、ゲルマン語から派生したドイツ語や英語にも大きな影響を与えている。

ところで文語としてのラテン語は、中世においても、学問の世界やキリスト教業界では「ヨーロッパ共通語」として用いられた。現在では、ラテン語はほぼ「死語」として扱われ、代わって英語が世界共通語の地位につきつつあるけれども、ラテン語も意外といろいろなところで発見できる。例えば、すべての生物につけられる「学名」は基本的にラテン語の 2 単語で付けられることになっている（ヒト・・・*Homo sapiens*（賢い人、の意））。ラテン語の歌詞のミサ曲はよく歌われるし、ことわざや慣用句としては英文中でもラテン語の言い回しが登場する（エトセトラ（et cetera）やアプリオリ（a priori）など）。

ラテン語に使われる文字は、基本的に A、B、C、・・・の普通のアルファベットである。ただし、W は基本的に出てこない。また、K も Kalendae（一日）という単語を除けばあまり出てこない。Y と Z はギリシア語から移入された単語にしか出てこない。そして、J と U も古典期にはまだなかった。I が I と J の文字を兼ね、V が U と V の文字を兼ねていたのである。I と V が子音と母音を兼ねていたのを、（母音と子音とで）文字を分けたのは後代のことである。ただし本書では分かりやすさを重視して、I と V のほかに J と U も用いることにする。また小文字や句読点ができたのも後代であるが、本書では現代の表記法を用いることにする。これは日本語の古文の教科書にたいてい句読点が付いているのと同じである。

ラテン語を印刷した印刷物では、ae や oe のスペルを、æ や œ というように「合字」で書く場合があるが、合字で書かれているからといって何かが変わるわけではない。

ラテン語は義務教育で教えられている言語ではないので、日本での文法用語が固まっていない場合がよくある。よって本書で使用されている文法用語は「私が恣意的に選んだ文法用語」あるいは「私が作りだした文法用語」である。文法用語というのは客観的なものではなく、主観がかなり入ったものだ。それは覚えておいた方がよい。

I-iii **発音とアクセント**

ラテン語は現在ネイティブがいないので、「正しい」発音というのを一概に決めることができない。日本では「古典式発音」（古典ラテン語時代の教養ある市民の発音を再現したもの。）を用いるのが標準であるので、ここではそれを紹介する（中世などの作品を読むときや歌う時は「イタリア式発音」や「ドイツ式発音」などをすることが多いので、専門書を参照してほしい）。

発音は「基本的にローマ字読み」でよい。以後、注意点やそれと異なる点のみ述べていく。

まず母音は a,e,i,o,u の 5 つだが、これらは「ア」「エ」「イ」「オ」「ウ」と短く読むときと「アー」「エー」「イー」「オー」「ウー」と読むときとがある。前者を「短母音」、後者を「長母音」と呼ぶ。単語ごとにどちらなのかは決まっているのだが、これはスペルから分かるものではなく、辞書を引かなければ分からない。辞書において、ただ a,e,i,o,u とあったら短母音である。辞書において、ā,ē,ī,ō,ū というように上に棒がついていたらこれは長母音である。ただしこれは辞書や文法書の世界だけであって、もとの文章に長音記号（棒）はついていないので、一つ一つの単語を覚えていないと正確に長短を読み分けることはできない。

あと、y も母音である。発音はドイツ語の ü のようにする（まあ「u をもう少し前で」というか、「ユ」というか、「u と i の中間」というか）。

子音は、（英語と違って）スペルを見れば（辞書を引かずとも）読みが分かる。注意すべきは c で、これは常に[k]の発音である。ca,ci,cu,ce,co は「カ・キ・ク・ケ・コ」である。ci を見ると「シ」とか「スィ」とか「チ」とか「ツィ」とか言いたくなる人がいるので注意。あと g も常に[g]の発音であり、ga,gi,gu,ge,go は「ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ」である。gi を「ジ」とか読まないように。あと ch や th や ph の綴りに騙されないように。普通に

ローマ字読みなので、cha は「チャ」ではなく「クハ」という発音（実際は「カ」の勢いあるバージョンみたいな発音）になる。tho は「ソ」ではなく「トゥホ」（実際は勢いある「ト」）になる。

あと、ローマ字と違うやつらがいる。

まず j は[j]の発音、すなわち「ヤ」行になる。そもそも j は i なのだから。jo は io を読むつもりで。次に v は[w]の発音になる。これも本来 u と同じ文字だから納得。q は必ず次に u が来ることになっていて、qu で発音は[kw]となる。ngu や su も後ろに母音が来るとそれぞれ[ngw][sw]という発音になる。

b は s,t の直前では[p]という発音になる（例えば urbs は「ウルプス」となる。ちなみに、この単語の複数形 urbēs は b が s の直前ではないので普通に「ウルベース」と読む）。

j は母音に挟まれると[ij]という発音になる。そしてその場合、直前の長母音は短母音で読まれる（例えば mājor という語はそのまま読むと[ma:jor]っぽいが、[maijor]すなわち「マイヨル」という発音になる）。ただし Gāius は例外で「ガーイウス」と読むらしい。

次にアクセントの話をする。アクセントは高低アクセント説が濃い。

まず 1 音節語はどうでもいい。2 音節語は、後ろから 2 音節目（つまり最初の音節）にアクセントがある。3 音節語以上の語は、「後ろから 2 音節目」が長ければそこにアクセントが、「後ろから 2 音節目」が短ければ「後ろから 3 音節目」にアクセントがある。

アクセント規則で使うのは「音節」の長短であり、「母音」の長短ではない。「音節」の長短の話をする。まず長母音や二重母音の音節は無条件に長音節となる。次に、母音の後に 2 つ以上の子音がある場合も長音節となる。ただし「閉鎖音（p,b,ph,t,d,th,c,k,g,ch）＋流音（l,r）」の組み合わせは合わせて一子音とみなす。また qu も一子音とみなす。

なお、接尾辞が付いた単語は、必ず接尾辞の直前にアクセントがつく。

I-iv 品詞

品詞は 8 つ。英語と同じ。きっちり覚えること。英語名を併記した（こちらも覚えたい）。

1. 名詞　noun
2. 代名詞　pronoun
3. 形容詞　adjective
4. 動詞　verb
5. 副詞　adverb
6. 前置詞　preposition
7. 接続詞　conjunction
8. 間投詞　interjection

I-v 語順

「主語→間接目的語→直接目的語→動詞」が普通の語順だが、そうじゃない文も普通に出てくる。（読む側としては）「ラテン語の語順は自由」と思っていて差し支えない。基本的に強調したい語を最初か最後に持ってくる。特に、詩はいろいろ事情があって語順がぐちゃぐちゃになりやすい。

II 名詞と形容詞（前編）

II-i 性・数・格の概念

ラテン語において、名詞・形容詞・代名詞は特徴が似ている。この 3 つの品詞に共通する概念が、性・数・格

の概念である。「性」は、男性・女性・中性の 3 つである。「数」は、単数・複数の 2 つである。「格」は、主格・属格・与格・対格・奪格・呼格の 6 つである。それぞれについて解説する。

まず、性から。名詞はそれぞれ文法上の性をもつ。自然の性があるもの（例えば「父」や「娘」）は、自然の性に従って男性・女性に振り分けられる。性を持たないモノ（例えば「つくえ」や「天」や「愛」）は、すべて男性・女性・中性のいずれかに決められている（「つくえ」（mensa）は女性、「天」（caelum）は中性、「愛」（amor）は男性である）。

すべての形容詞は、一単語で男性形・女性形・中性形を持ち、文中では、その場で修飾する名詞の性と同じ性の形を用いる。代名詞も同様で、その代名詞が指し示している名詞の性にあった形を用いる。

次に、数について。まず、すべての名詞は単数形と複数形をもっている（これは英語と同じ）。形容詞も単数形と複数形をもっており、修飾する名詞が単数形なら形容詞も単数形、修飾する名詞が複数形なら形容詞も複数形を用いる。代名詞も同様で、指し示す名詞の単複に応じて単複の形を使い分ける。

格は、文中の役割を示す。簡単に言えば「日本語ではどの助詞がつくか」ということである。以下に格の一覧を挙げる。日本語名と読み、対応する助詞はここで覚えること。

格	英語名	略称	読み	対応する助詞
主格	nominative	nom.	しゅかく	～が、～は
属格	genitive	gen.	ぞっかく	～の
与格	dative	dat.	よかく	～に
対格	accusative	acc.	たいかく	～を
奪格	ablative	abl.	だっかく	（後述）
呼格	vocative	voc.	こかく	～よ

ラテン語には助詞はない。しかも語順は自由である。つまり「太郎 花子 愛する」みたいな文になっている。これでは「太郎が花子を愛する」なのか「太郎を花子が愛する」なのか分からない。しかしラテン語の名詞は、6 つの格ごとに（基本的には）別の語形を持っている。だから、太郎が主格で花子が対格なら、「太郎が花子を愛する」と特定できるわけである。

形容詞も 6 つの格の語形を持っており、修飾する名詞の格に合った語形を用いる。代名詞も指し示す名詞の格に合わせて格を変化させる。

以上を考えると、一つの名詞は 2（数）×6（格）＝12 の変化形を持っているということになる。例えば、dominus（主人）という単語は、dominum なら単数対格形（主人を）、dominōrum なら複数属格形（主人たちの）とわかるわけである。また、一つの形容詞や代名詞は 3（性）×2（数）×6（格）＝36 の変化形を持っている。例えば、bonus（よい）という形容詞は、bonam なら女性単数対格形、bone なら男性単数呼格形、bonā なら、女性単数奪格形と分かるわけだ。

なお、代名詞に関しては VI で詳述する。以降 II では名詞・形容詞を中心に解説する。

奪格の用法のメインは前置詞の目的語としての用法であるが、これは IV で解説する。またその他の格の用法も合わせて VII-i で詳述する。

さて、この名詞の 12 の変化形や形容詞の 36 の変化形は、いくつかのパターンを覚えなければならない。具体的に言えば、名詞には「第 1 変化」「第 2 変化」「第 3 変化」「第 4 変化」「第 5 変化」の 5 つが、形容詞には「第 1・第 2 変化」「第 3 変化」の 2 つがある。

II-ii 第 1 変化と第 2 変化、第 1・第 2 変化

名詞の第 1 変化は、単数属格形が-ae で終わる名詞のための変化パターンである。ラテン語の辞書は、名詞なら基本的に単数主格形で引くのだが、必ず単数属格形も併記されている。それを見れば第 1 変化かが分かる。

第 1 変化名詞は、大半が女性名詞である。以下に変化表を示す。「-」（ハイフン）は不変化部である。

	単数	複数
主格	-a	-ae
属格	-ae	-ārum
与格	-ae	-īs
対格	-am	-ās
奪格	-ā	-īs
呼格	-a	-ae

例えば rosa,-ae f.で例示すると、rosā なら単数奪格、rosās なら複数対格と分かるわけである。ところが rosae は単数属格か単数与格か複数主格か複数呼格か分からない。こういう時は周囲の単語の変化形から判断したり、文脈から判断したりしなければならなくなる。

先ほど rosa,-ae f.と書いたが、以降、名詞を示す時には単数主格形の後に単数属格形を付記する。そしてその後に性を付記する。m.は男性、f.は女性、n.は中性である。

次に第 2 変化。名詞の第 2 変化は、単数属格形が-ī で終わる名詞のための変化パターンであるが、これはさらに 3 つに細分化される。以下に変化表を示す。

(1)単数主格が-us で終わる名詞（ほとんどは男性名詞）

	単数	複数
主格	-us	-ī
属格	-ī	-ōrum
与格	-ō	-īs
対格	-um	-ōs
奪格	-ō	-īs
呼格	-e	-ī

※単数主格が-ius で終わる名詞についての注釈。単数呼格は本来-ie となるはずだが、-i-が-e を飲み込んで長母音となる。よって-ius（単数主格）に対して-ī（単数呼格）となる。また、単数属格も本来-iī となるはずだが、たいていまとめて一つの長母音になる。よって-ius（単数主格）に対して-ī（単数属格）となる。例を挙げると、単数主格 Horātius、単数属格 Horātī、単数与格 Horātiō、単数対格 Horātium、単数奪格 Horātiō、単数呼格 Horātī、である（Horātius は人名）。アクセント位置は縮約前の語形から考える。

(2)単数主格が-um で終わる名詞（すべて中性名詞）

	単数	複数
主格	-um	-a
属格	-ī	-ōrum
与格	-ō	-īs
対格	-um	-a
奪格	-ō	-īs
呼格	-um	-a

※単数主格が-ium で終わる名詞についての注釈。単数属格は本来-iī となるはずだが、たいていまとめて一つの長母音になる。よって-ium（単数主格）に対して-ī（単数属格）となる。アクセント位置は縮約前の語形から考える。

(3)単数主格が-er で終わる名詞（すべて男性名詞）

	単数	複数
主格	-er	-erī
属格	-erī	-erōrum
与格	-erō	-erīs
対格	-erum	-erōs
奪格	-erō	-erīs
呼格	-er	-erī

※(3)に属する名詞の中には、単数主格と単数呼格以外の活用語尾で-e-が落ちるものもある（こうなるものは辞書の単数属格形を見れば分かる）。それらの活用語尾は-er,-rī,-rō,-rum,･･･となる。

いくつか例を示す。amīcus,-ī m.「(男性である）友人」の単数主格は amīcus、単数属格は amīcī、単数与格は amīcō、単数対格は amīcum、・・・である。oppidum,-ī n.「都市」では、例えば、単数主格は oppidum、単数奪格は oppidō、複数属格は oppidōrum である。puer,-erī m.「少年」では、例えば、単数主格は puer、単数属格は puerī、単数対格は puerum、複数与格は puerīs である。liber,-brī m.「本」では、例えば、単数主格は liber、単数属格は librī、複数主格は librī、複数対格は librōs である。

さて、名詞の「第 1 変化」と「第 2 変化」を組み合わせたものが、形容詞の「第 1・第 2 変化」である。

第 1 変化名詞はたいてい女性名詞、第 2 変化名詞はたいてい男性名詞か中性名詞だった。そこで、女性を第 1 変化に担当してもらい、男性と中性を第 2 変化に担当してもらえば、3 性がそろう。形容詞は 1 つの語が 3 性の変化形をもっているため、どちらかだけでは無理なのである。こうしてできたのが形容詞の「第 1・第 2 変化」である。

第 2 変化男性名詞は単数主格が-us で終わるパターンと-er で終わるパターンとの 2 つがあった。そのどちらを採用するかによって、形容詞の「第 1・第 2 変化」にも 2 パターン生まれる。以下に変化表を挙げる。

(1)単数主格が-us,-a,-um で終わる形容詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-us	-a	-um
	属格	-ī	-ae	-ī
	与格	-ō	-ae	-ō
	対格	-um	-am	-um
	奪格	-ō	-ā	-ō
	呼格	-e	-a	-um
複数	主格	-ī	-ae	-a
	属格	-ōrum	-ārum	-ōrum
	与格	-īs	-īs	-īs
	対格	-ōs	-ās	-a
	奪格	-īs	-īs	-īs
	呼格	-ī	-ae	-a

(2)単数主格が-er,-era,-erum で終わる形容詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-er	-era	-erum
	属格	-erī	-erae	-erī
	与格	-erō	-erae	-erō
	対格	-erum	-eram	-erum
	奪格	-erō	-erā	-erō
	呼格	-er	-era	-erum
複数	主格	-erī	-erae	-era
	属格	-erōrum	-erārum	-erōrum
	与格	-erīs	-erīs	-erīs
	対格	-erōs	-erās	-era
	奪格	-erīs	-erīs	-erīs
	呼格	-erī	-erae	-era

※先ほどと同じように、男性単数主格および男性単数呼格以外では-e-が落ちるタイプもある（そういうものの基本形は-er,-ra,-rum となる）。

形容詞は、男性単数主格形が辞書の見出し形になる。第 1・第 2 変化形容詞の場合、男性単数主格形の後ろに、女性単数主格形、中性単数主格形が併記される（たとえば、bonus,-a,-um（よい）や miser,-era,-erum（哀れな）のように）。

これもいくつか例示する。magnus,-a,-um「大きい」では、例えば男性単数対格は magnum、女性複数属格は magnārum、中性単数奪格は magnō である。līber,-era,-erum「自由な」では、例えば男性単数主格は līber、女性単数対格は līberam、中性複数主格は lībera である。pulcher,-chra,-chrum「美しい」では、例えば男性単数主格は pulcher、男性単数対格は pulchrum、女性複数対格は pulchrās、中性複数与格は pulchrīs である。

II-iii **第 3 変化**

さて、ちょっと難しいのが第 3 変化である。名詞も形容詞も第 3 変化がある。

まずは名詞から。第 3 変化とは、単数属格が-is で終わる名詞の変化である。男性名詞も女性名詞も中性名詞もある。数も多い。第 3 変化名詞には「子音幹名詞」「混合 i 幹名詞」「純粋 i 幹名詞」の 3 種類があり、しかも男性・女性名詞と中性名詞では変化形が異なるので、結局 6 つの変化パターンがある（でも微妙に違うだけであるが）。

(1)子音幹名詞

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	※	-ēs	※	-a
属格	-is	-um	-is	-um
与格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
対格	-em	-ēs	※	-a
奪格	-e	-ibus	-e	-ibus
呼格	※	-ēs	※	-a

※単数主格は不規則。そして、単数呼格は単数主格と等しい。中性名詞においてはさらに、単数対格も単数主格と等しい。

(2)混合 i 幹名詞

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	※	-ēs	※	-a
属格	-is	-ium	-is	-ium
与格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
対格	-em	-ēs(-īs)	※	-a
奪格	-e	-ibus	-e	-ibus
呼格	※	-ēs	※	-a

※単数主格は不規則。そして、単数呼格は単数主格と等しい。中性名詞においてはさらに、単数対格も単数主格と等しい。

(3)純粋 i 幹名詞

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	-is	-ēs	※	-ia
属格	-is	-ium	-is	-ium
与格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
対格	-im	-īs(-ēs)	※	-ia
奪格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
呼格	-is	-ēs	※	-ia

※中性名詞では、単数主格は数種類ある。そして単数主格＝単数対格＝単数呼格。

ほとんどの第 3 変化名詞は単数主格が不規則なので、変化させる場合は、辞書に載っている単数属格形を変化させなければならない。例えば、「平和」を意味する語は pāx,pācis f.（子音幹）であるが、単数主格と単数呼格以外は pācis をもとに変化させなければならない。逆に、我々がテクストを読んでいて辞書を引こうと思ったら、単数主格で引かなければいけないので、不規則な単数主格を推測しなければならないというわけである。例えば、pācibus（複数与格・複数奪格）とあったら pāx（単数主格）で引かなければいけないのだ。単数主格形の作り方はいくつかパターンがあるのだが、列挙していてはキリがないし、本当に不規則なものもけっこうあるので、まあ経験がものをいうことになる。あとは単数属格形を頼りに、ひたすら辞書を流し読みして探すことになる。

次に、ある第 3 変化名詞が「子音幹」「混合 i 幹」「純粋 i 幹」のうちどれになるかを見分ける方法を記す。（その前に、「等数音節語」「異数音節語」という用語を覚えてほしい。単数主格と単数属格の音節数が、同じものが前者、異なるものが後者、である。「音節数」は「母音の数」と考えてよい。）

☆男性名詞・女性名詞

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が 1 つ　　子音幹

（例）labor,labōris m.「労働」　lēx,lēgis f.「法律」

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が複数　　混合 i 幹

（例）urbs,-bis f.「都市」　mōns,montis m.「山」　mors,mortis f.「死」

（例外）pater,-tris m.「父」　māter,-tris f.「母」　などいくつかは子音幹

◎等数音節語で単数主格が-is や-ēs で終わる　　混合 i 幹（ただし以下の 2 種類を除く）

（例）fīnis,-is「終わり」　cīvīs,-is m.f.「市民」

◎-is で終わる川の名前と都市の名前　　純粋 i 幹

（例）Tiberis,-is m.「ティベリス川」

◎次の女性名詞　　純粋 i 幹

turris,-is「塔」　febris,-is「熱」　puppis,-is「船尾」　secūris,-is「斧」　sitis,-is「渇き」

☆中性名詞

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が 1 つ　　子音幹

（例）flūmen,-minis n.「川」　ōs,ōris n.「口、顔」

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が複数　　混合 i 幹

（例）os,ossis n.「骨」

◎単数主格が-ar や-al や-e で終わる　　純粋 i 幹

（例）animal,-ālis「動物」

次に、第 3 変化形容詞について。第 3 変化形容詞には「2 語尾型」「3 語尾型」「1 語尾型」の 3 タイプがある。

(1)「2 語尾型」

（例）omnis,-is,-e「すべての」

		男性	女性	中性
単数	主格	-is		-e
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		-e
	奪格	-ī		
	呼格	-is		-e
複数	主格	-ēs		-ia
	属格	-ium		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia
	奪格	-ibus		
	呼格	-ēs		-ia

(2)「3 語尾型」

（例）ācer,-cris,-cre「鋭い」

		男性	女性	中性
単数	主格	※	-is	-e
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		-e
	奪格	-ī		
	呼格	※	-is	-e
複数	主格	-ēs		-ia
	属格	-ium		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia
	奪格	-ibus		
	呼格	-ēs		-ia

※男性単数主格は-er で終わる。不活用部が変化するものがある。男性単数呼格＝男性単数主格。

(3)「1 語尾型」

（例）fēlīx（単数属格 fēlīcis）「幸福な」

		男性	女性	中性
単数	主格	※1		
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		※1
	奪格	-ī　※2		
	呼格	※1		
複数	主格	-ēs		-ia　※2
	属格	-ium　※2		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia　※2
	奪格	-ibus		
	呼格	-ēs		-ia　※2

※1　単数主格は 3 性とも共通だが、不規則である。単数呼格は 3 性とも単数主格に等しい。中性単数対格は、単数主格に等しい。

※2　単数奪格は-e になることがある。また複数属格・中性複数主格・中性複数対格・中性複数呼格は、-i-が落ちるときがある。これらは、「1 語尾型」が子音幹に由来していることによる。いくつか、必ずこうなる形容詞もある。

第 3 変化形容詞は、辞書において、「2 語尾型」「3 語尾型」は男性単数主格の後ろに女性単数主格と中性単数主格を付記する（ただし 2 語尾型は女性単数主格を省略することがある）。「1 語尾型」は 3 性共通単数主格の後ろに 3 性共通単数属格を付記する（fēlīx の例では、fēlīx,-īcis と書く）。

II-iv 第 4 変化と第 5 変化

第 4 変化は単数属格が-ūs で終わる名詞の変化である。第 5 変化は単数属格が-eī や-ēī で終わる名詞の変化である。いずれもあまり登場頻度は高くない。また、形容詞に第 4 変化や第 5 変化はない。

第 4 変化

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	-us	-ūs	-ū	-ua
属格	-ūs	-uum	-ūs	-uum
与格	-uī(-ū)	-ibus	-ū(-uī)	-ibus
対格	-um	-ūs	-ū	-ua
奪格	-ū	-ibus	-ū	-ibus
呼格	-us	-ūs	-ū	-ua

第 5 変化

	単数	複数
主格	-ēs	-ēs
属格	-eī ※	-ērum
与格	-eī ※	-ēbus
対格	-em	-ēs
奪格	-ē	-ēbus
呼格	-ēs	-ēs

※「単数属格が-ēī の名詞」もあり、それらは単数与格が-ēī となる（それ以外は同じ）。

II-v 名詞・形容詞の変化のまとめ

第 1 変化から第 5 変化までをまとめて比較する。

名詞

	単数主格	単数属格	性	単語数
第 1 変化	-a	-ae	ほぼ女性	多い
第 2 変化	-us か-um か-er	-ī	ほぼ男性・中性	多い
第 3 変化	いろいろ	-is	3 性とも	多い
第 4 変化	-us か-ū	-ūs	3 性とも	少なめ
第 5 変化	-ēs	-eī か-ēī	男性・女性	少ない

形容詞

	単数主格	単語数
第 1・第 2 変化	-us,-a,-um	多い
	-er,-era,-erum	少なめ
	-er,-ra,-rum	少なめ
第 3 変化	-is,-is,-e	多い
	～,-is,-e	少なめ
	～	多い

ここでいくつか補足をする。

「単数主格≠単数呼格」なのは「-us で終わる第 2 変化名詞」と「-us,-a,-um 型の第 1・第 2 変化形容詞（の男性形）」のみであり、それ以外はすべて「単数主格＝単数呼格」である。また「複数主格＝複数呼格」「複数与格＝複数奪格」は常に成り立つ。中性名詞および形容詞中性形では、「主格＝対格」である。これらを覚えておくと便利である。

また、名詞を暗記するときには、「単数主格→単数属格（の語尾）→性→語義」の順で覚えるのが理想的。例えば、mors,mortis f.「死」だったら、「mors、mortis、女性、死」とひたすら唱えて覚える。

形容詞は基本的に名詞を修飾する品詞であるが、それ単独で用いて「～な人」「～なもの」を表すことがある（けっこうある）。英語における「the young＝若者」のようなものである（ラテン語には冠詞はない）。この用法を私は「形容詞の名詞的用法」と呼ぶ。

たまに、複数形で単数を表す名詞や、複数形しかない名詞というのがある。また固有名詞は複数形を使っているものも多い（Athēnae,-ārum f.「アテネ」など）。複数形であることを気にする必要はあまりないが、変化形は複数形のものを使うし、修飾する形容詞は複数形になる。

これまで「格は 6 つ」と言ってきたが、「地格」（「位格」とも。英：locative）という格が、固有名詞および一

部の普通名詞（domus,-ūs f.「家」や rūs,rūris n.「田舎」など）に残っている。これは「～に（おいて）」「～で」を表す。固有名詞の地格は、第 1 変化単数・第 2 変化単数では属格と同形、第 1 変化複数・第 2 変化複数・第 3 変化の固有名詞では奪格と同形である。domus と rūs の地格は、domī と rūrī という独自の形を用いる。

III 動詞（前編）

III-i 活用の概要

ラテン語の文（英語もそうだが）は、基本的に動詞がないと成立しない。文の述語となれるのは動詞だけである。動詞の活用形のなかには他の品詞のはたらきをするものもあるが、他の品詞が動詞の役割を果たすことはできない。どの言語においても、動詞の習得はその言語の習得の根幹をなす。ラテン語文法の文法書も、最初に名詞と形容詞の格変化を学習した後は、動詞の活用形を順々にやりつつ、その気分転換のように他の品詞がたびたび入ってくるような構成になっていることが多い。

動詞は、「活用」と呼ばれる変化をする。動詞の活用形は大きく分けて、文の述語となる「定動詞」の活用形と、あたかも他の品詞であるかのようにはたらく「準動詞」の活用形とがある。

定動詞のほうは、「法」「時制」「態」「人称」「数」で活用形が変わり、この 5 つの要素のうち一つでも違うと基本的には別の語形になる。

「法」には、「直説法」「接続法」「命令法」がある（なお、準動詞には「不定法」というものがある。たんに「法」と言うと「不定法」も含む場合がある）。

「時制」には、「現在」「過去」「未来」「現在完了」「過去完了」「未来完了」の 6 つがある。名称は英語と同じだが、用法は英語とは異なる部分もあるので注意。この時制の名称は（特に「過去」「現在完了」は）文法書によってさまざまで、「未完了過去」「過去不完了」「半過去」などは「過去」の別名、「完了」「完了過去」「複合過去」などは「現在完了」の別名である。というより逆に、「過去」や「現在完了」という用語が用いられるのは稀である。ただ、ここでは英語文法で馴染んでいる名称を使おうということで、この名称を採用している。

「態」は「能動態」と「受動態」の 2 つ。英語と同じ。用法も基本的な部分は、英語と同じ。

「人称」は、主語が「1 人称」「2 人称」「3 人称」のいずれであるかということ。

「数」は、主語が「単数」「複数」のいずれであるかということ。

よって、英語文法では「saw は see の何形ですか」と尋ねられたら（普通は）「過去形です」と答えるが、ラテン語文法で「amāvērunt は amō の何形ですか」と尋ねられたら「直説法現在完了能動態 3 人称複数形です」と答えなければならない。

ちなみに、ラテン語において、動詞の辞書見出し形は「直説法現在能動態 1 人称単数」（すなわち「私は～する」の形）なので、ある動詞の語形について「△△は◎◎の～～形」と言う場合、◎◎には「直説法現在能動態 1 人称単数」の語形を入れる（先ほどの例では、amō がそれである）。ただし、現代ヨーロッパ諸言語においては◎◎の部分に「不定法現在能動態」（準動詞の一種）の語形を入れる慣例になっている（そもそも辞書見出し形が「不定法現在能動態」である）ので、現代の言語を専門にしつつラテン語に言及する人は、この◎◎に「不定法現在能動態」を入れることがある。この点には注意が必要である。

なお、動詞の活用形は、普通に一語の場合もあるが、英語の「be+過去分詞＝受動態」のように二語以上で表現するものもある。このような形態を「回説方式」と呼ぶ（この名称も文法書によるけれど）。

準動詞には、「不定法」「現在能動分詞」「完了受動分詞」「未来能動分詞」「動名詞」「動形容詞」「スピーヌム」がある。これらは、定動詞のように「法」「時制」「態」「人称」「数」で変化するのではなく、（不定法を除き）名詞や形容詞のような変化（性・数・格による変化）をする。活用形・用法は VIII で詳述する。

以上の定動詞・準動詞の活用形を表にまとめると、次のようになる。

ラテン語動詞の活用形一覧表

※欄の「回」は回説方式を表す。「現」「完」「ス」の記号は後述する。

	法	時制	態×人称×数　〔格×数×性〕	※	活用形の数
定動詞	直説法	現在	能受×123×単複	現	12
		過去	能受×123×単複	現	12
		未来	能受×123×単複	現	12
		現在完了	能×123×単複	完	6
			受×123×単複	回	(6)
		過去完了	能×123×単複	完	6
			受×123×単複	回	(6)
		未来完了	能×123×単複	完	6
			受×123×単複	回	(6)
	接続法	現在	能受×123×単複	現	12
		過去	能受×123×単複	現	12
		現在完了	能×123×単複	完	6
			受×123×単複	回	(6)
		過去完了	能×123×単複	完	6
			受×123×単複	回	(6)
	命令法	現在	能受×2×単複	現	4
		未来	能受×23×単複 （ただし受 2 複はなし）	現	7
準動詞	不定法	現在	能受	現	2
		未来	能受	回	(2)
		現在完了	能	完	1
			受	回	(1)
	現在能動分詞		〔主属与対奪呼×単複×男女中〕	現	36
	完了受動分詞		〔主属与対奪呼×単複×男女中〕	ス	36
	未来能動分詞		〔主属与対奪呼×単複×男女中〕	ス	36
	動名詞		〔属与対奪×単〕	現	4
	動形容詞		〔主属与対奪呼×単複×男女中〕	現	36
	スピーヌム		〔対奪〕	ス	2
合計					254 (33)

さて、この表を見ても分かるだろうが、回説方式を除いても 254 もの活用形がある。これらの活用形は、一つの語形の語尾を変えて作られるのではない。辞書には、どの動詞も、「直説法現在能動態 1 人称単数」「直説法現在完了能動態 1 人称単数」「スピーヌム対格」が載せられている（見出しは「直説法現在能動態 1 人称単数」である）。とりあえず、この 3 つは相互に作ることはできないと考えてよい（だから辞書に 3 語形が載せてある）。残りの 251 の活用形は、この 3 つのうちいずれかの語尾を規則的に変えることによって作られる。ここでは、「直説法現在能動態 1 人称単数」を元に作られる活用形を「現在グループ」、「直説法現在完了能動態 1 人称単数」を元に作られる活用形を「完了グループ」、「スピーヌム対格」を元に作られる活用形を「スピーヌムグループ」と

呼ぶことにする。それぞれの活用形がどのグループに属するかは先ほどの表の「※」欄の「現」「完」「ス」で確認できる。

さらに、現在グループの活用形の語尾の付け替え方は、5 パターンある。それぞれ「第 1 活用」「第 2 活用」「第 3 活用」「第 3 活用 b」「第 4 活用」という。すべての規則変化動詞は、それぞれ 5 つのうちどれか一つに属する。それがどれなのかを知るためには、「不定法現在能動態」の語尾を見ることになる。これも必ず辞書に載っている。

	「不定法現在能動態」の語尾	「直説法現在能動態 1 人称単数」の語尾
第 1 活用	-āre	-ō
第 2 活用	-ēre	-eō
第 3 活用	-ere	-ō
第 3 活用 b	-ere	-iō
第 4 活用	-īre	-iō

結局、辞書では、見出しの「直説法現在能動態 1 人称単数」の後ろに「不定法現在能動態」「直説法現在完了能動態 1 人称単数」「スピーヌム対格」が続き、そのあとにやっと語義がくる。

さて、これから規則変化動詞の具体的な活用形を見ていくことになるが、不規則変化動詞もある。これは 254 の活用形を覚えてもらうしかない（実際はある程度は規則的なので、そこまで酷ではない）。不規則変化動詞には、sum,esse,fuī（スピーヌムなし）「～である、ある（英：be）」や eō īre iī[īvī] itum「行く」などがある。不規則変化動詞の活用形は、たいてい辞書や文法書の巻末に掲載されている。テクストを読んでいてそれっぽい単語にあたったら、この活用表をあたることになる。ちなみに不規則動詞をもとにして作られた複合動詞も不規則変化動詞なので注意が必要である（英語でも、stand－stood に倣って understand－understood となる。それと同じ）。不規則変化動詞については IX-v で少し触れる。

III-ii **直説法現在・過去・未来（能動態）**

まずは、直説法現在・直説法過去・直説法未来の能動態を見ていく。これらは現在グループなので、第 1 活用～第 4 活用まで、別々の活用をするので注意すること。不定法現在能動態の語尾を見ながら活用させなければならない。では、活用表を見ていく。

今後、動詞の活用表では、最初の段に活用の元となる形（現在グループでは「直説法現在能動態 1 人称単数」と「不定法現在能動態」）を示し、それから当該活用形（の語尾）を示す。なお、表中では「直説法現在能動態 1 人称単数」を「直現能 1 単」と、「不定法現在能動態」を「不現能」と、それぞれ略記する。「-」（ハイフン）は活用によって変化しない部分を示す。

直説法現在能動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
	2 人称	-ās	-ēs	-is	-is	-īs
	3 人称	-at	-et	-it	-it	-it
複数	1 人称	-āmus	-ēmus	-imus	-imus	-īmus
	2 人称	-ātis	-ētis	-itis	-itis	-ītis
	3 人称	-ant	-ent	-unt	-iunt	-iunt

直説法過去能動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-ābam	-ēbam	-ēbam	-iēbam	-iēbam
	2 人称	-ābās	-ēbās	-ēbās	-iēbās	-iēbās
	3 人称	-ābat	-ēbat	-ēbat	-iēbat	-iēbat
複数	1 人称	-ābāmus	-ēbāmus	-ēbāmus	-iēbāmus	-iēbāmus
	2 人称	-ābātis	-ēbātis	-ēbātis	-iēbātis	-iēbātis
	3 人称	-ābant	-ēbant	-ēbant	-iēbant	-iēbant

直説法未来能動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-ābō	-ēbō	-am	-iam	-iam
	2 人称	-ābis	-ēbis	-ēs	-iēs	-iēs
	3 人称	-ābit	-ēbit	-et	-iet	-iet
複数	1 人称	-ābimus	-ēbimus	-ēmus	-iēmus	-iēmus
	2 人称	-ābitis	-ēbitis	-ētis	-iētis	-iētis
	3 人称	-ābunt	-ēbunt	-ent	-ient	-ient

直説法現在能動態のみ amō,-āre,-āvī,-ātum「愛する」で例示すると、amō,amās,amat,amāmus,amātis,amant である。活用表の不変化部は、同じ語の同グループの活用形ではすべて同じである（amō の現在グループでは am-である）。

基本的に、1 人称単数→2 人称単数→･･･→3 人称複数の順に、-m,-s,-t,-mus,-tis,-nt という語尾（「人称語尾」という）になっている（ただし、1 人称単数は-ō もある）。あとは、不活用部と人称語尾の間に入るもの（そして入るものの母音の長短）を覚えるだけである（ただしたまに不意打ちがあるので、そこは注意する）。ラテン語の動詞では、不活用部が語義を、人称語尾が「態」「人称」「数」を、その間が「法」「時制」を表す。

次に、この 3 つの時制の（直説法における）意味を示す。

まず、「現在」。これは「～する」「～している」を表す（ラテン語には「現在進行形」はないので「～している」も「現在」で表す）。

次に、「過去」。これは注意が必要で、「～していた」という意味を表す。英語では「過去進行形」に近く、英語の「過去形」（「～した」という訳）とは違う（ラテン語の「現在」「過去」「未来」は、「現在完了」「過去完了」「未来完了」と対比して言うなら「現在未完了」「過去未完了」「未来未完了」である。「過去未完了」だから「～した」ではなく「～していた」となる）。

「未来」は、普通に「～するだろう」「（未来に）～する」でよい。2 人称だと命令を表すこともある。

III-iii 直説法現在完了・過去完了・未来完了（能動態）

さてさて、次は完了グループの 3 時制である。

完了グループの元になる形は「直説法現在完了能動態 1 人称単数」なので、完了グループの活用表は最初の段にその語尾を挙げる。なお、表中では「直説法現在完了能動態 1 人称単数」を「直現完能 1 単」と略記する。

以下に、直説法現在完了・過去完了・未来完了の能動態の活用表を示す。

直説法現在完了能動態

		すべて
直現完能 1 単		-ī
単数	1 人称	-ī
	2 人称	-istī
	3 人称	-it
複数	1 人称	-imus
	2 人称	-istis
	3 人称	-ērunt

直説法過去完了能動態

		すべて
直現完能 1 単		-ī
単数	1 人称	-eram
	2 人称	-erās
	3 人称	-erat
複数	1 人称	-erāmus
	2 人称	-erātis
	3 人称	-erant

直説法未来完了能動態

		すべて
直現完能 1 単		-ī
単数	1 人称	-erō
	2 人称	-eris
	3 人称	-erit
複数	1 人称	-erimus
	2 人称	-eritis
	3 人称	-erint

直説法現在完了だけ、人称語尾が特殊なので、そこはがんばってもらわなくてはいけない。まあ直説法現在完了はかなり頻出なので、そのうち勝手に覚えるけども。

さて、この 3 つの時制の用法を示す。

まず、「現在完了」のメインの用法は、「～した」という用法である（英語の「過去形」に相当する）。だから「現在完了」は頻出なのである。

あと、「現在完了」には、訳出時に注意が必要な用法（例えば、「知る」の「現在完了」は通常、「知った」よりも「知っている」と訳す。「～である」の「現在完了」は、「～だった」ではなく、「もう～でない」と訳す）もたまにある。でもとりあえずは「～した」を覚えておいてもらえばよい。

ちなみに、格言的内容では（過去のことでもないのに）「現在完了」を使うことがある。逆に、物語や史記などで、臨場感を出すために過去のことで「現在」を使うことがある。

「過去完了」はたいてい従属節などにおいて、ある過去（「現在完了」や「過去」で書かれている）において既に完了していたことを表す。

「未来完了」もたいてい従属節などにおいて、ある未来（「未来」で書かれている）において既に完了している（であろう）ことを表す。

III-iv 直説法現在・過去・未来（受動態）

受動態の話に移る。基本的に意味は「～される」であり、能動態では対格だった目的語が主語（主格）になる。動作主「～によって」（英：by～）を示したい場合には、人の場合は前置詞 ā や ab（奪格支配；IV を参照）「～によって」を用い、物の場合は前置詞なしの奪格（手段の奪格；VII-i を参照）を用いる。

英語では現在形の受動態は、「be 動詞の現在形+過去分詞」で表すが、ラテン語ではひたすら語尾変化で表す。人称語尾は「態」も表しているため、受動態では、能動態の時とは違う人称語尾を使用して表す。

活用表を示す。現在グループである。

直説法現在受動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-or	-eor	-or	-ior	-ior
	2 人称	-āris	-ēris	-eris	-eris	-īris
	3 人称	-ātur	-ētur	-itur	-itur	-ītur
複数	1 人称	-āmur	-ēmur	-imur	-imur	-īmur
	2 人称	-āminī	-ēminī	-iminī	-iminī	-īminī
	3 人称	-antur	-entur	-untur	-iuntur	-iuntur

直説法過去受動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-ābar	-ēbar	-ēbar	-iēbar	-iēbar
	2 人称	-ābāris	-ēbāris	-ēbāris	-iēbāris	-iēbāris
	3 人称	-ābātur	-ēbātur	-ēbātur	-iēbātur	-iēbātur
複数	1 人称	-ābāmur	-ēbāmur	-ēbāmur	-iēbāmur	-iēbāmur
	2 人称	-ābāminī	-ēbāminī	-ēbāminī	-iēbāminī	-iēbāminī
	3 人称	-ābantur	-ēbantur	-ēbantur	-iēbantur	-iēbantur

直説法未来受動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-ābor	-ēbor	-ar	-iar	-iar
	2 人称	-āberis	-ēberis	-ēris	-iēris	-iēris
	3 人称	-ābitur	-ēbitur	-ētur	-iētur	-iētur
複数	1 人称	-ābimur	-ēbimur	-ēmur	-iēmur	-iēmur
	2 人称	-ābiminī	-ēbiminī	-ēminī	-iēminī	-iēminī
	3 人称	-ābuntur	-ēbuntur	-entur	-ientur	-ientur

能動態の文の対格（目的語）が主格（主語）になるとき、動詞が受動態になる。

よって基本的には自動詞は受動態にならないはずであるが、まれに受動態になることがある。そういうときには、主語は書かれず、動詞は 3 人称単数形にされ、「～という行為が行われる」と訳される（例えば、「広場へ行

く」は自動詞の文だが、「行く」が受動態になると、「広場へ行くという行為がなされる」という意味になる)。

III-v 直説法現在完了・過去完了・未来完了(受動態)

完了グループの受動態は、打って変わって「be+過去分詞」作戦をとる。英語でいう be は、ラテン語では sum にあたる。またラテン語文法では過去分詞ではなく「完了受動分詞」と言う。

よって、ラテン語の完了グループの受動態は、「sum+完了受動分詞」という形をとることになる。ここで注意点がいくつかある。

「現在完了受動態」には、sum の「現在能動態」を使用する。英語では I have been loved by him.(私は彼に愛され続けている)などと「現在完了受動態」には be の「現在完了能動態」を用いる。しかしラテン語では sum の「現在能動態」を用いるので注意が必要である。同じようにラテン語では、「過去完了受動態」には sum の「過去能動態」を、「未来完了受動態」には sum の「未来能動態」を用いる。

つぎに完了受動分詞についての注意だが、完了受動分詞は動詞の「準動詞」の活用形の一種で、形容詞のはたらきをするものである。つまり、性・数・格による変化がある。すべての動詞の完了受動分詞は「第 1・第 2 変化」をする。そして受動態として sum と使う時には、主語と性・数・格を一致させなければならない(まあ、格は主格と決まっているが)。

最後に、完了受動分詞の作り方を説明する。完了受動分詞は、スピーヌムグループの活用形で、スピーヌム対格をもとに作る。スピーヌム対格は必ず-um で終わっているので、これを-us,-a,-um にすれば完成である。つまりスピーヌム対格は、完了受動分詞の中性単数主格に等しいと考えてよい。

sum は不規則変化動詞の代表であるが、このように完了グループの受動態を作るときにも必要であるし、第一「〜だ」を表す動詞なんだから、なるべく活用形を覚えたい(IX-v を参照)。

III-vi デーポーネンティア

ラテン語の動詞には、受動態しか持たず、受動態で能動の意味を表す動詞がいくつかある(いや、けっこうな数ある)。こういう動詞をラテン語で dēpōnēns(単数形)・dēpōnentia(複数形)という(dēpōnēns,-entis n.)。日本語訳は文法書によってさまざまで、「形式受動態動詞」「形式所相動詞」「デポネント動詞」「能動欠如動詞」などと呼ばれている。英語では deponent verb と言う。本書ではラテン語そのままに、「デーポーネーンス」(単数)・「デーポーネンティア」(複数)を用いることにする。

デーポーネンティアの辞書見出し形は、「直説法現在受動態 1 人称単数」であり、その後ろに「不定法現在受動態」「直説法現在完了受動態 1 人称単数(男性形)」が続く。「直説法現在完了受動態 1 人称単数」は「sum+完了受動分詞」で表され、その完了受動分詞からは容易にスピーヌム対格が作れるため、スピーヌム対格は書かれない。

というより、デーポーネンティアというのは、完了グループの活用形がない動詞なのである。完了グループというのは能動態の活用形しか持っていない。つまり能動態を捨て去ってしまえば、完了グループはなくていいというわけである。だから辞書に載せる語形が 1 つ少なくてもいいわけである。

第 1 変化〜第 4 変化を受動態語尾で見分けなければいけなくなるので、ここに表を挙げる。

	「不定法現在受動態」の語尾	「直説法現在受動態 1 人称単数」の語尾
第 1 活用	-ārī	-or
第 2 活用	-ērī	-eor
第 3 活用	-ī	-or
第 3 活用 b	-ī	-ior
第 4 活用	-īrī	-ior

また、少数ではあるが「未完了系の時制では能動態を使い、完了系の時制では受動態を使う」という中途半端な動詞もあり、これは sēmidēpōnens,-entis n.と呼ばれる（この用語の日本語訳では頭に「半」が付く）。完了グループは完了系でしかでてこないので、未完了系では普通にやってもらって、完了系だけ能動態を捨て去ろうという、効率がいいようで実に面倒な奴らである。辞書見出し形は「直説法現在能動態 1 人称単数」「不定法現在能動態」「直説法現在完了受動態 1 人称単数」となる。

IV 前置詞

前置詞は、後ろに名詞または代名詞をしたがえて（この名詞や代名詞はその前置詞の「目的語」と呼ばれる）、副詞や形容詞のはたらきをする句をつくる品詞である。

目的語は、対格または奪格におかれる。それが対格になるか奪格になるかは、それぞれの前置詞によって決まっている。ある格を目的語にとることを、その格を「支配」すると言う（「支配」という用語は、前置詞だけでなく、動詞や形容詞などに関しても使う用語である）のだが、ある前置詞が対格支配なのか奪格支配なのかは、辞書でその前置詞を引くと載っている（逆に言えば辞書を引かなければ分からない）。

いくつかは対格も奪格も支配する前置詞もある。その種の前置詞は、対格支配の場合と奪格支配の場合とで意味が変わるので注意が必要である。

とはいえ、前置詞自身は語形変化しないので、辞書を引くのは簡単である。頻出のものは、そのうち支配する格とともに覚えてしまうことだろう。

ただし cum という前置詞（奪格支配 ;「～とともに」などの意）は特殊で、人称代名詞（ときには関係代名詞の場合も）を目的語にとる場合、目的語に後置してしかも目的語と合わせて一語で綴られる。例えば tēcum とあったら cum＋tē である（tē は人称代名詞「あなた」の単数奪格で、tēcum で「あなたとともに」の意）。なお、人称代名詞・関係代名詞に関しては VI-ii と VI-iii で解説する。

V 接続詞・間投詞・副詞

接続詞は、節と節、句と句、語と語をつなぐ働きをする。語形変化はないから、出てきたら辞書を引けば載っている。et が英語で言う and だということを覚えておけば充分。ちなみに「&」は et を記号化したもの。

間投詞は、「ああ」とか「おお」とか「やあ」とか「ハレルヤ」とかそういう言葉。語形変化はないからそのまま辞書を引けばよい。

副詞は、名詞や代名詞以外を修飾する単語。すなわち、形容詞や動詞や句や節や文などを修飾する。英語と同様に（一部は）比較変化はある（これは VII-ii で詳述する）。それ以外、語形変化はない。

なお、（直説法で）否定文を作るには、否定の副詞 nōn を動詞の直前に置けばよい。

VI 代名詞

VI-i 概要

代名詞は、名詞の代わりをする品詞である。

日本語文法においては、代名詞は名詞の一部とされることがある。また、英語における代名詞の定義というのもなかなか曖昧なものもある。ラテン語における代名詞の定義としては「一つの特定のものではなく、状況に応

じて様々なものを指しうる単語で、かつ、名詞の第 1 変化～第 5 変化のいずれとも微妙に（or 全く）違う変化をする単語」ということになると思う。

種類としては以下のものがある。

1. 人称代名詞
2. 再帰代名詞
3. 関係代名詞
4. 疑問代名詞
5. 指示代名詞
6. 強意代名詞
7. 不定代名詞

1.・2.と 3.～7.は特徴が大きく異なる。1.と 2.は人称・数・格による変化をし、変化形は非常に不規則である。3.～7.は性・数・格による変化をし、そのままの形で（あるいは微妙に違う形で）形容詞になることがあり、「単数属格と単数与格が 3 性同形になる」という特徴を持ち、わりと第 1・第 2 変化っぽい変化をする（とは言ってもけっこう不規則）。

まあ用法は種類ごとにけっこう異なるので、種類ごとに順に解説していくことにする。

VI-ii 人称代名詞と再帰代名詞

人称代名詞は、「私」「あなた」を代名詞である。英語で言えば、I,me,you,us などに該当する。英語と同様、ラテン語の人称代名詞も、人称・数・格で変化する。

	1 人称単数	2 人称単数	1 人称複数	2 人称複数
主格	ego ※	tū	nōs	vōs
属格	meī	tuī	nostrī nostrum	vestrī vestrum
与格	mihi ※	tibi ※	nōbīs	vōbīs
対格	mē	tē	nōs	vōs
奪格	mē	tē	nōbīs	vōbīs

※egō, mihī, tibī と語末が長母音の場合もある。

3 人称の人称代名詞（英：he,she,it など）はラテン語にはない。既出の 3 人称の人や事物を表すには、「指示代名詞」の is,ea,id（彼・彼女・それ）を基本的に使用する。この単語は、人称代名詞ではなくて指示代名詞なので、指示形容詞「その」としてもはたらくことができる。よって英語だと he,she,it と the を組み合わせたみたいな単語ということになる。変化表などは指示代名詞などを扱った VI-v を参照。

主語と同じ人物がその文中で出てくる場合に、そこで使う代名詞を「再帰代名詞」という。英語では He loves himself.（彼は自身を愛している）の himself がこれに該当する。しかしラテン語の再帰代名詞は、1 人称・2 人称では人称代名詞と同形なので、ことさら再帰代名詞であることを意識しなくてもよい。ただ、「再帰代名詞には 3 人称もある」というのが相違点である。再帰代名詞の 3 人称は単複同形である。

	1 人称単数	2 人称単数	3 人称	1 人称複数	2 人称複数
属格	meī	tuī	suī	nostrī nostrum	vestrī vestrum
与格	mihi ※1	tibi ※1	sibi ※1	nōbīs	vōbīs
対格	mē	tē	sē ※2	nōs	vōs
奪格	mē	tē	sē ※2	nōbīs	vōbīs

※1 mihī, tibī, sibī とも。 ※2 強意のため sēsē とも。

さて、人称代名詞・再帰代名詞に関する注意点を述べる。

まず、ラテン語の文は、主語を必ずしも書く必要はない。なぜなら、主語が 1 人称や 2 人称の場合は、動詞の人称語尾で分かってしまうからだ。3 人称は、「3 人称」ということが分かったところで結局誰だか分からないから、最初は書かなければならないけれど、2 回目以降など、主語が言われなくても分かる場合は書く必要がない。よって 1 人称・2 人称の人称代名詞主格はあまり出てこない（逆に、わざわざ ego,tū,nōs,vōs が書かれていたら、その主語を強調したいということである）。

次に、ラテン語の人称代名詞の属格は、「所有」を表さない。ここが英語の人称代名詞の所有格（my,your など）との大きな違いである。ラテン語の人称代名詞の属格は、属格支配の動詞や形容詞とともに使ったり、「部分の属格」として使ったりする。用法については VII-i を参照されたい。

複数では属格が 2 つあるが、上段が属格支配の動詞や形容詞とともに用いるときに、下段が「部分の属格」として用いるときに、それぞれ選択される。

ラテン語で「所有」を表すには、「所有形容詞」を用いる。これらは普通の形容詞である。ただし、3 人称は「再帰所有形容詞」としてしか使うことができない（主語と違う 3 人称の「所有」は、指示代名詞の属格を用いる）。

1 人称単数　meus,-a,-um
2 人称単数　tuus,-a,-um
3 人称　suus,-a,-um
1 人称複数　noster,-tra,-trum
2 人称複数　vester, -tra,-trum

すべて第 1・第 2 変化形容詞である。形容詞は、「修飾される名詞」の性・数・格に一致して変化するのであり、例えば「mea」と meus,-a,-um が女性形になっていたからといって、「私」が女性なのではない。「私の持っていたもの」が女性名詞だっただけである。そこに注意すること。

また、所有形容詞は「形容詞の名詞的用法」として用いられるとき、（当たり前だが）「～のもの」という意味になる（「所有代名詞」とも呼ばれる）。

VI-iii **関係代名詞**

関係代名詞の用法は、基本的に英語と同じである。ただし、形容詞と同じように、性・数・格で変化する。性・数は、先行詞に一致させる。関係文中でもその代名詞は先行詞を表しているわけだから、それは間違えようがないだろう。格は、関係文中での役割（関係文中で何格になるべきか）に応じて決まる（これも英語と同じだが）。先行詞の格と一致するわけではないから注意されたい。

変化表を以下に示す。

		男性	女性	中性
単数	主格	quī	quae	quod
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quam	quod
	奪格	quō	quā	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

ところどころは第 1・第 2 変化をしているが、例外も多く、結局全部覚えなければならないようなものである。ちなみに「複数与格＝複数奪格」「中性では、主格＝対格」のルールはここでも守られている。代名詞の変化の特徴として、「単数属格と単数与格が 3 性共通になる」というのがある。

用法について、補足をする。

一つ目に、ラテン語は語順がわりと自由な言語なので、直前が先行詞とは限らない。先行詞は、関係代名詞の性や格から文法的に判断できるし、文脈からも判断できるだろう。また、たまに先行詞より前に関係節が来ることがある（こういう場合、たいていは文頭に関係節が来て、そのあとに主節が来る）。

二つ目に、英語における I like people who always smile.（私は、いつも笑っている男性たちが好きだ。）のように「～をする人」「～をするもの」と言いたいとき、先行詞を is,ea,id（指示代名詞；彼・彼女・それ；VI-v を参照）とするときがよくある（英語で書くと*I like them who always smile.みたいになる（これは英語ではあまり聞いたことがない。言うかは分からない））。また、先行詞を省略する場合がある（英語で書くと*I like who always smile.みたいになる（これは英語では非文；英語ではモノの先行詞を含んだ関係代名詞として what がある））。

三つ目に、先行詞が関係節の中で繰り返されたり、先行詞が関係節の中に取り込まれてしまうことがある。

四つ目に、関係節が SVC の文構造（sum の文など）のとき、関係代名詞がこの S に当たる場合は、関係代名詞の性が、先行詞に一致する場合と C に一致する場合とがある。英語での例文で説明すると、I visited Rome, which is the capital of Italy.（私はローマを訪ねた。それはイタリアの首都だ。）において、Roma はラテン語では女性名詞（Roma,-ae f.）、capital はラテン語では中性名詞である（caput,-pitis n.）。本来なら、関係代名詞は先行詞の Roma に合わせて女性形（quae）になるところだが、C である中性名詞 capital に一致して中性形（quod）になることがある（ここまで英語の例文で説明したが、これはすべてあくまでラテン語の話。でもラテン語で例文を作ると読む気をなくすので英語で説明しているだけ。なお英語のこれらの名詞の性を私は知らない。これに対応するラテン語の性である）。

五つ目に、SVC の文構造のとき、関係代名詞が C の場合には中性になる。これは、疑問代名詞や指示代名詞にも共通したルールである。

六つ目に、関係代名詞の前にピリオドで切ってある場合がある。英語で言えば、Yesterday, I met the boy. Who was playing baseball.（昨日、私はその少年に会った。彼は野球をしていた。）のような文になる。

以上六つの補足を総合すると、あまりカリカリせずに、わりと柔軟に対応することが重要である。

ラテン語の関係代名詞は、先行詞を修飾するように訳すよりも、関係節を別の文のように訳すとうまくいくことがけっこうあるので、あんまり訳し上げにこだわらないように。

関係形容詞もたまに出てくるが、変化形は関係代名詞と同形である。

不定関係代名詞「～ところの人（モノ）はだれ（何）でも」は、quīcumque,quaecumque,quodcumque または quisquis,quisquis,quidquid を用いる。前者は quī-,quae-,quod-の部分を普通の関係代名詞と同じように変化をさせる。-cumque の部分は不変化である。後者は関係代名詞を 2 度繰り返した語形になるが、単数主格のみ quīquī,quaequae,quodquod ではなく quisquis,quisquis,quidquid となる。これらの不定関係代名詞は、先行詞は書かない。

VI-iv **疑問代名詞、疑問文**

疑問代名詞は、名詞となるべきところを尋ねるときに、そこを埋めるために用いられる代名詞で、「何」「だれ」に相当する。英語では who, whose, whom, what などに相当する。

これも代名詞なので、性・数・格による変化をする。なんだか分からないものを訊くわけだから、性・数については答えを想像するしかないが（ただし、SVC の文構造の C に相当する場合は、中性形を用いるというルールがある）。

変化形を以下に示す。

疑問代名詞

		男性	女性	中性
単数	主格	quis	quis	quid
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quem	quid
	奪格	quō	quō	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

複数形は関係代名詞とまったく同じ変化、単数形は少し違う変化をする（しかも単数では男性と女性が同形になる）。英語でも、関係代名詞と疑問代名詞は（どちらも wh-で）似ている。

ところで、答えの種類が分かっているときや答えの種類を制限するときは（「何」や「誰」ではなく）「どの～」や「何の～」と訊く。こういうときには、「疑問形容詞」を用いる。これは形容詞であるが、通常の形容詞の変化ではなく、関係代名詞と全く同じ変化をする。変化形を以下に示す。

疑問形容詞

		男性	女性	中性
単数	主格	quī	quae	quod
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quam	quod
	奪格	quō	quā	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

疑問副詞は（副詞なので）語形変化はないから、文章を読んでいて出てきたときには、そのままの語形で辞書を引けばよい。代表的なもののみここに挙げておく。

ubi （どこに） quō（どこへ） quandō（いつ） quam（どれほど）

ところで、これまで見てきた「疑問詞（＝疑問代名詞・疑問形容詞・疑問形容詞の総称）を用いる疑問文」を「特殊疑問文」という。それに対し、イエスかノーかで答えられる疑問文を「一般疑問文」という。英語で例を挙げれば、What do you want?（あなたは何が欲しいか）は特殊疑問文、Do you want the car?（あなたはその車が欲しいのか）は一般疑問文である。

ラテン語の一般疑問文は、肯定文を作った後に以下の方法のいずれかによって作ることができる。

1. 文頭の語に接尾辞-ne を付ける。
2. 文頭に副詞 nōnne を付け加える。（肯定を予想）
3. 文頭に副詞 num を付け加える。（否定を予想）

接尾辞-ne は単語にくっつけて書かれるので、一瞬あせってしまう。例えば、Dominus ～.という文を 1.の方法で疑問文にすると、Dominusne ～?となる。辞書で dominusne をもとに辞書を引いても載っていないので気をつけよう。

一般疑問文に答えるとき、2 つの方法がある。

一つは普通の文で答える方法。普通の肯定文を言えば肯定だし、nōn を付けた否定文を言えば否定になる。例えば、Labōrāsne?「あなたは働くか。」(labōrō,-āre,-āvī,-ātum「働く」は、直説法現在能動態 2 人称単数が labōrās である）に対しては、Labōrō.「私は働く。」または Nōn labōrō.「私は働かない。」と答えればよい。

もう一つは、普通の文に副詞を付けたり、(動詞を省略して）副詞のみで答える方法。肯定の副詞には、ita, sīc「さよう、しかり」、certē「たしかに」、etiam, sane, vērō「たしかに、もちろん」などがある。否定の副詞には、nōn「～ない」や minimē「けっして～ない」などがあり、これらに vēro, quidem, herche「まったく、たしかに、きっと」を付加することもできる。

「～か、…か」という疑問文は、「Utrum ～ an … ?」という構文で書くことができる。また、Utrum の代わりに文頭語に接尾辞-ne を付けて表すこともできるし、Utrum を単に省略しても表すことができる。また、～の部分を特殊疑問文にすることもできる（特殊疑問文にしたときは Utrum や-ne は用いない)。

VI-v 指示代名詞・強意代名詞・不定代名詞

残る代名詞は、指示代名詞・強意代名詞・不定代名詞の 3 つであるが、ここで 3 つまとめて終わらせてしまうことにする。指示代名詞は、既出のものやその場にあるものを指し示すものである。強意代名詞は、別の名詞・代名詞を「それ自身」と強調する代名詞である。不定代名詞は、「ある～」など特に指し示すものを一つに定めない代名詞である。

それぞれの具体的な意味は、変化表に付すことにする。

指示代名詞や不定代名詞は（たいていはそのままの変化表で、あるいは似た変化表で）形容詞として用いられることもあり、その場合は「指示形容詞」「不定形容詞」と呼ばれる（英語で言えば、This is a pen.の This は「指示代名詞」であり、This camera is nice.の This は「指示形容詞」である)。

変化のしかたは相変わらず特殊である。それはしょうがない。ここでも「単数属格と単数与格は 3 性共通」という代名詞特有の変化をする。

代名詞は基本的に、指し示しているものに性・数を一致させる。

hic, haec, hoc これ（指示代名詞)、この（指示形容詞）　・・・話し手に近いもの

		男性	女性	中性
単数	主格	hic	haec	hoc
	属格	hūjus	hūjus	hūjus
	与格	huīc	huīc	huīc
	対格	hunc	hanc	hoc
	奪格	hōc	hāc	hōc
複数	主格	hī	hae	haec
	属格	hōrum	hārum	hōrum
	与格	hīs	hīs	hīs
	対格	hōs	hās	haec
	奪格	hīs	hīs	hīs

iste, ista, istud それ（指示代名詞）、その（指示形容詞）　・・・聞き手に近いもの

		男性	女性	中性
単数	主格	iste	ista	istud
	属格	istīus	istīus	istīus
	与格	istī	istī	istī
	対格	istum	istam	istud
	奪格	istō	istā	istō
複数	主格	istī	istae	ista
	属格	istōrum	istārum	istōrum
	与格	istīs	istīs	istīs
	対格	istōs	istās	ista
	奪格	istīs	istīs	istīs

※単数属格の-īus は-ius と短いときもある。

ille, illa, illud あれ（指示代名詞）、あの（指示形容詞）　・・・遠いもの、有名なもの

		男性	女性	中性
単数	主格	ille	illa	illud
	属格	illīus	illīus	illīus
	与格	illī	illī	illī
	対格	illum	illam	illud
	奪格	illō	illā	illō
複数	主格	illī	illae	illa
	属格	illōrum	illārum	illōrum
	与格	illīs	illīs	illīs
	対格	illōs	illās	illa
	奪格	illīs	illīs	illīs

※単数属格の-īus は-ius と短いときもある。

※iste,ista,istud の-st-を-ll-に換えるだけ。

is, ea, id それ（指示代名詞）、その（指示形容詞）　・・・話に既出のもの

		男性	女性	中性
単数	主格	is	ea	id
	属格	ējus	ējus	ējus
	与格	eī	eī	eī
	対格	eum	eam	id
	奪格	eō	eā	eō
複数	主格	eī, iī, ī	eae	ea
	属格	eōrum	eārum	eōrum
	与格	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs
	対格	eōs	eās	ea
	奪格	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs

※3 人称の人称代名詞のはたらきもする。人称代名詞については VI-ii を参照。

※人称代名詞ではないので、属格は「所有」も表す。

īdem, eadem, idem 同じもの（指示代名詞）、同じの（指示形容詞）

		男性	女性	中性
単数	主格	īdem	eadem	idem
	属格	ējusdem	ējusdem	ējusdem
	与格	eīdem	eīdem	eīdem
	対格	eundem	eandem	idem
	奪格	eōdem	eādem	eōdem
複数	主格	eīdem, iīdem, īdem	eaedem	eadem
	属格	eōrundem	eārundem	eōrundem
	与格	eīsdem, iīdem, īsdem	eīsdem, iīdem, īsdem	eīsdem, iīdem, īsdem
	対格	eōsdem	eāsdem	eadem
	奪格	eīsdem, iīdem, īsdem	eīsdem, iīdem, īsdem	eīsdem, iīdem, īsdem

ipse, ipsa, ipsum それ自身（強意代名詞）

		男性	女性	中性
単数	主格	ipse	ipsa	ipsum
	属格	ipsīus	ipsīus	ipsīus
	与格	ipsī	ipsī	ipsī
	対格	ipsum	ipsam	ipsum
	奪格	ipsō	ipsā	ipsō
複数	主格	ipsī	ipsae	ipsa
	属格	ipsōrum	ipsārum	ipsōrum
	与格	ipsīs	ipsīs	ipsīs
	対格	ipsōs	ipsās	ipsa
	奪格	ipsīs	ipsīs	ipsīs

※他の名詞・代名詞にその性・数・格で付加して、「それ自身」「そのもの」「まさに」「自分で」などの意を表す（ただ、省略された主語に付加される場合もある）。再帰代名詞（VI-ii 参照）とは違うので注意。

不定代名詞は、とりあえず主格のみ列挙する。語義は「人」のみ記すが、これは「もの」の場合もある。

aliquis, aliquis, aliquid　ある人（肯定文に）

quisquam, quisquam, quidquam(quicquam)　だれも（否定文に）（不定形容詞にならない）

quis, quis, quid　ある人（肯定文に）

quisque, quaeque, quidque　各々、各人

quispiam, quispiam, quidpiam　誰かある人

quīdam, quaedam, quiddam　ある人

quīvīs, quaevīs, quidvīs　だれでも

quīlibet, quaelibet, quidlibet　だれでも

これらは、基本的に「-quis-, -quis-, -quid-」あるいは「-quī-, -quae-, -quid-」の部分のみ変化させる。不定代名詞は「不定形容詞」としても用いられるが、どちらのタイプの代名詞も形容詞では共通の変化をする。以下に変化表を示す（基本的には「疑問代名詞」と「疑問形容詞」にならっている）。なお、活用部が-m-で終わり、その後ろに不活用部が続く場合、この-m-が-n-に変わるときがある。

「-quis-, -quis-, -quid-」型の不定代名詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-quis-	-quis- か -qua-	-quid-
	属格	-cūjus-	-cūjus-	-cūjus-
	与格	-cuī-	-cuī	-cuī-
	対格	-quem-	-quem-	-quid-
	奪格	-quō-	-quō-	-quō-
複数	主格	-quī-	-quae-	-quae- か -qua-
	属格	-quōrum-	-quārum-	-quōrum-
	与格	-quibus-	-quibus-	-quibus-
	対格	-quōs-	-quās-	-quae- か -qua-
	奪格	-quibus-	-quibus-	-quibus-

「-quī-, -quae-, -quid-」型の不定代名詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-quī-	-quae-	-quid-
	属格	-cūjus-	-cūjus-	-cūjus-
	与格	-cuī-	-cuī-	-cuī-
	対格	-quem-	-quem-	-quid-
	奪格	-quō-	-quā-	-quō-
複数	主格	-quī-	-quae-	-quae-
	属格	-quōrum-	-quārum-	-quōrum-
	与格	-quibus-	-quibus-	-quibus-
	対格	-quōs-	-quās-	-quae-
	奪格	-quibus-	-quibus-	-quibus-

不定形容詞として用いる場合

		男性	女性	中性
単数	主格	-quī-	-quae- か -qua-	-quod-
	属格	-cūjus-	-cūjus-	-cūjus-
	与格	-cuī-	-cuī-	-cuī-
	対格	-quem-	-quam-	-quod-
	奪格	-quō-	-quā-	-quō-
複数	主格	-quī-	-quae-	-quae- か -qua-
	属格	-quōrum-	-quārum-	-quōrum-
	与格	-quibus-	-quibus-	-quibus-
	対格	-quōs-	-quās-	-quae- か -qua-
	奪格	-quibus-	-quibus-	-quibus-

VI-vi 代名詞的形容詞

「代名詞的形容詞」は、第 1・第 2 変化をするにもかかわらず、単数属格と単数与格が（あたかも代名詞のように）3 性共通となる形容詞である。とりあえず、以下に変化表を掲げる。

(1)単数主格が-us,-a,-um で終わる

		男性	女性	中性
単数	主格	-us	-a	-um
	属格	-īus	-īus	-īus
	与格	-ī	-ī	-ī
	対格	-um	-am	-um
	奪格	-ō	-ā	-ō
	呼格	-e	-a	-um
複数	主格	-ī	-ae	-a
	属格	-ōrum	-ārum	-ōrum
	与格	-īs	-īs	-īs
	対格	-ōs	-ās	-a
	奪格	-īs	-īs	-īs
	呼格	-ī	-ae	-a

(2)単数主格が-er,-era,-erum で終わる

		男性	女性	中性
単数	主格	-er	-era	-erum
	属格	-erīus	-erīus	-erīus
	与格	-erī	-erī	-erī
	対格	-erum	-eram	-erum
	奪格	-erō	-erā	-erō
	呼格	-er	-era	-erum
複数	主格	-erī	-erae	-era
	属格	-erōrum	-erārum	-erōrum
	与格	-erīs	-erīs	-erīs
	対格	-erōs	-erās	-era
	奪格	-erīs	-erīs	-erīs
	呼格	-erī	-erae	-era

※基本形が「-er,-ra,-rum」のものは、男性単数主格および男性単数呼格以外で、上表の-e-を取ればよい。

(3)alius,-a,-ud（例外；ただし複数は(1)に同じ）

		男性	女性	中性
単数	主格	alius	alia	aliud
	属格	alīus	alīus	alīus
	与格	aliī	aliī	aliī
	対格	alium	aliam	aliud
	奪格	aliō	aliā	aliō
	呼格	alie	alia	aliud

※alius,-a,-ud の単数属格 alīus は実際にはまれで、alter,-era,-erum の単数属格 alterīus で代用される。

さて、「代名詞的形容詞」は数が限られている。以下のものがある。

sōlus, -a, -um　単独の

ūnus, -a, -um　1 つの（数詞 ; VII-iii も参照）

nūllus, -a, -um　1 つも～ない　（名詞的用法は属格・奪格のみ）

nōnnūllus, -a, -um　いくつかの

tōtus, -a, -um　全体の、全部

ūllus, -a, -um　1 つも（～ない）、どんなものも（～ない）　（名詞的用法は属格・奪格のみ）

uter, -tra, -trum　どちらが（疑問形容詞（英 which に相当））

neuter, -tra, -trum　どちらも～ない

uterque, -traque, -trumque　どちらも

alter, -era, -erum　一方の、他方の

alius, -a, -ud　他の

辞書でパッと見たところは普通の第 1・第 2 変化形容詞なので、単数属格・単数与格が出てきたときにちょっと焦ってしまうので、存在は知っておいたほうがよい。

本章で長々と解説してきた代名詞は以上で終わりだが（というか「代名詞的形容詞」は形容詞だが）、全体的に変化形が微妙に不規則である。代名詞はそれほど頻出でないので、それほど覚える必要がないといえばそうだが、知らないうちに覚えてしまうということもあまりない。そして唐突に出てきたときに焦る。疑問代名詞や疑問形容詞は qu-で始まるのですぐ変化表を見てしまえばよいが、ējus とか出てきたときに指示代名詞の is,ea,id の変化形だと分からないとどうしようもない。-us で終わっているからといって名詞の主格と勘違いして e の項目を引いても載っていない。is,ea,id は辞書で i の項目に載っているわけだから。そういう意味で、代名詞は（不規則変化動詞と並んで）けっこうな強敵である。

VII 名詞と形容詞（後編）

VII-i 格の用法

これまではさしあたって、主格「～が」属格「～の」与格「～に」対格「～を」呼格「～よ」で済ませてきたが、それぞれの格にはさまざまな用法がある。我々が和訳をするときには、これらの用法のうちどれなのかを文脈から考えなければならない。

A. 主格

1. 主語「～が」

B. 属格

1. 所有の属格「～の」（例：父の家）{sum の述語としても用いることができる}
2. 説明の属格「～という」「～の」（例：マルクスという名、ローマの街）
3. 主語的属格「～の」「～による」（例：父の愛）
4. 目的語的属格「～への」（例：文学への没頭）
5. 部分の属格「～の」（例：人々の多く）{属格が「全体」を、被修飾語が「部分」を表す}
6. 性質の属格「～の」「～を持った」（例：偉大な才能の男）{属格の語には必ず形容詞がつく}
7. 価値の属格「～の価値で」{「大きい」の属格が「価値の高い」という意味になるなど}
8. 限定の属格「～の点で」{まれ}
9. 罪の属格「～の罪で」「～（をした）という理由で」{「訴える」や「断罪する」とともに}
10. 属格支配の動詞・形容詞とともに

C. 与格

1. 他動詞の間接目的語「～に」
2. 所有の与格「～にある」「～のものだ」{sum の述語として}
3. 利害（利害関係）の与格「～のために」「～にとって」（例：人生のために学ぶ）
4. 目的の与格(1)「～に」「～として」「～のために」（例：ご褒美に与える）
5. 目的の与格(2)「～になる」「～である」（例：喜びになる、有害になる）{sum の述語として}
6. 行為者の与格「～によって」{通例、動形容詞とともに}
7. 判断者の与格「～にとっては」「～から見れば」（例：多くの人にとっては彼女は美しい）
8. 分離の与格「～から」（例：若者から生命を奪う）{「奪う」や「取り除く」などの動詞と}
9. 関心の与格{生き生きした関心を表すために、関心者の人称の人称代名詞の与格 mihi,tibi,sibi が特に意味を持たずに添えられることがある。翻訳はしづらい}
10. 共感の与格「～の」{所有の属格の代わりに、その被修飾物へのその人物の共感と強調を表すために与格が使われることがある。詩的}（例：私の心、母の目）
11. 方向の与格「～へ」（例：手を天へ向ける）{まれ。詩的}
12. 与格支配の動詞・形容詞とともに

D. 対格

1. 他動詞の直接目的語{たまに対格目的語を 2 つ（人と事物）とる動詞もある}
2. 目的語の述語として{「O を C にする」「O を C と呼ぶ」などの C（もちろん O も対格）}
3. 広がりの対格（例：3 年住んでいた、10 マイル前進した）{時間・空間・距離など}
4. 限定の対格「～の点で」
5. 感嘆の対格「ああ、～！」「～よ！」（例：（ああ、）あわれな私！）
6. 対格支配の前置詞とともに

E. 奪格

1. 分離の奪格「～から」（例：心配事から解放する）
2. 起源の奪格「～から」（例：低い身分の両親から生まれた）
3. 比較の奪格「～よりも」（例：母は娘よりも美しい）{比較級については VII-ii を参照}
4. 随伴の奪格「～とともに」（例：妻とともに来る）
5. 仕方の奪格「～で」「～をもって」（例：平静な心で）{奪格の語は必ず形容詞を伴う}
6. 性質の奪格「～をもった」（例：大きな人望をもった人）{奪格の語は必ず形容詞を伴う。名詞に付けても用いられるし、述語的にも用いられる}
7. 手段の奪格「～で」「～によって」（例：バラでテーブルを飾る）
8. 価格の奪格「～で」（例：高額で売った）{売買・貸借などの価格を表す}
9. 原因の奪格「～で」「～のために」「～のせいで」（例：病気で苦しむ）{これに由来して causa,-ae と grātia,-ae の奪格 causā, grātiā は、「～のために」を表し、～は所有の属格で表す。例えば、honōris causā は、honōris が honor,-ōris m.「名誉」の単数属格で、2 語で「名誉のために」の意味である}
10. 差異の奪格「～だけ」（例：10 マイルだけ手前に）
11. 限定の奪格「～において」「～の点で」（例：制度の点で異なる）
12. 罰の奪格「～を」{「課す」や「判決を下す」などとともに。なお caput,-pitis n.「死刑」のみ、罰の奪格の代わりに属格を用いる}
13. 場所の奪格「～で」{tōtus,-a,-um「全」のついた名詞と、locus,-ī m.「場所」に限る}
14. 時の奪格「～に」（例：夏に）
15. 独立奪格構文（IX-i を参照）で

16. 奪格支配の動詞・形容詞とともに
17. 奪格支配の前置詞とともに

F. 呼格
1. 呼びかけ（例：アントニウスよ！）

VII-ii 比較級と最上級

形容詞と一部の副詞には比較級と最上級がある。

形容詞の比較級は、原級の男性単数属格をもとに作られ、第 3 変化形容詞のような変化をする。以下に比較級の作り方とその変化を示す。

		男性	女性	中性
原級の男性単数属格		-ī または-is		
単数	主格	-ior		-ius
	属格	-iōris		
	与格	-iōrī		
	対格	-iōrem		-ius
	奪格	-iōre (-iōrī)		
	呼格	-ior		-ius
複数	主格	-iōrēs		-iōra
	属格	-iōrum		
	与格	-iōribus		
	対格	-iōrēs		-iōra
	奪格	-iōribus		
	呼格	-iōrēs		-iōra

副詞にできる比較級は、主に形容詞から作られた副詞（例えば、altus,-a,-um「高い」から作られた altē「高く」や fortis,-is「強い」から作られた fortiter「強く」など。第 1・第 2 変化形容詞から作られた副詞は-ē、第 3 変化形容詞から作られた副詞は-iter や-er となる）である。このような副詞の場合、もとになった形容詞の比較級の中性単数対格を、この副詞の比較級ということにして用いる。

比較級の文ではたいてい「～より」ということを表すわけだが、これは接続詞 quam を用いる。これは前置詞ではなく接続詞なので、quam の後の名詞や代名詞は比較対象と格を一致させる。また、quam の後の名詞や代名詞が主格または対格の場合は、「quam+名詞」を用いる代わりに、その名詞を奪格にすることで「～より」を表すことができる（比較の奪格；VI-i を参照）。

最上級の話をする。形容詞は、最上級も原級の男性単数属格を元にして作り、-ī または-is を-issimus に変えて、それを-us,-a,-um 型で第 1・第 2 変化させればよい。例えば altus,-a,-um の最上級は、altissimus,-a,-um である。また例えば fēlīx,-cis「幸福な」の最上級は fēlīcissimus,-a,-um である。

副詞の最上級は、もとになった形容詞の最上級の語尾-issimus の-us を-ē に変えればよい。

最上級の文では、「部分の属格」（～のうち）や、前置詞 ex や dē「～のうち」、前置詞 inter「～の中で」がよくともに用いられる。

ここまで、比較級と最上級の規則的な作り方を説明したが、いくつか例外があるので、ここに列挙する。

1. 男性単数主格が-er で終わる形容詞は、最上級を作るときに男性単数主格の後ろに-rimus をつける。例えば pulcher,-chra,-chrum の最上級は pulcherrimus,-a,um となる。また例えば ācer,ācris の最上級は ācerrimus,-a,-um となる。

2. facilis,-is difficilis,-is similis,-is dissimilis,-is gracilis,-is humilis,-is の 6 つの-ilis で終わる形容詞は、最上級を作るときの語尾-issimus の代わりに-limus を用いる。例えば、facilis,-is の最上級は facillimus,-a,-um である（比較級は普通に facilior,-iōris である）。
3. 男性単数主格が-ius または-eus で終わる形容詞は比較級や最上級を作ることができない。このような形容詞は、原級に副詞 magis を添えることで比較級を、原級に副詞 maximē を添えることで最上級を、それぞれ表す。
4. 完全に不規則なものもある。一部を列挙する。比較級は男・女性単数主格のみ、最上級は男性単数主格のみ記す。

形容詞

bonus,-a,um「よい」　比較級 melior　最上級 optimus
malus,-a,-um「悪い」　比較級 pējor　最上級 pessimus
magnus,-a,-um「大きい」　比較級 mājor　最上級 maximus（māximus とも）
parvus,-a,-um「小さい」　比較級 minor　最上級 minimus
vetus,-a,-um「古い」　比較級 vetustior　最上級 veterrimus
juvenis,-is「若い」　比較級 jūnior　最上級 minimus nātū
senex,senis「老いた」　比較級 senior　最上級 maximus nātū

※これらは比較級語尾-or の部分を他の一般の形容詞の比較級の語尾の-or に当てはめて規則的に性・数・格の変化をする。最上級は普通に第 1・第 2 変化をする。

※multus,-a,-um の比較級（plūs）や最上級も不規則なのだがここでは省略する。

副詞

bene「よく」　比較級 melius　最上級 optimē
male「悪く」　比較級 pējus　最上級 pessimē
magnopere「非常に」　比較級 magis「いっそう」　最上級 maximē「最大に」
valdē「非常に」　比較級 magis「いっそう」　最上級 maximē「最大に」
multum「多く」　比較級 plūs　最上級 plūrimum
nōn multum「少なく」　比較級 minus　最上級 minimē

比較級や最上級が、とくに比較したいわけでもなく「とても」や「かなり」の意味で使われることがある。これを「絶対比較級」や「絶対最上級」と呼ぶ。

VII-iii **数詞**

「数詞」とは「基数詞」「序数詞」「配分数詞」「数副詞」の総称である。

「基数詞」とは、「1 つの」「2 つの」・・・という形容詞である。英語の one, two, ・・・に当たる。1 と 2 と 3 は性・格で変化するので、その変化をまず示す。

ūnus,-a,-um　「1 つの」　（代名詞的形容詞）

		男性	女性	中性
単数	主格	ūnus	ūna	ūnum
	属格	ūnīus	ūnīus	ūnīus
	与格	ūnī	ūnī	ūnī
	対格	ūnum	ūnam	ūnum
	奪格	ūnō	ūnā	ūnō
	呼格	ūne	ūna	ūnum

duo,-ae,-o　「2 つの」

		男性	女性	中性
複数	主格	duo	duae	duo
	属格	duōrum	duārum	duōrum
	与格	duōbus	duābus	duōbus
	対格	duōs(duo)	duās	duo
	奪格	duōbus	duābus	duōbus
	呼格	duo	duae	duo

trēs,trēs,tria　「3 つの」

		男性	女性	中性
複数	主格	trēs	trēs	tria
	属格	trium	trium	trium
	与格	tribus	tribus	tribus
	対格	trēs, trīs	trēs, trīs	tria
	奪格	tribus	tribus	tribus
	呼格	trēs	trēs	tria

では、基数詞を一覧にする。（男性主格のみ示す。）

1	I	ūnus	
2	II	duo	
3	III	trēs	
4	IV	quattuor	
5	V	quīnque	
6	VI	sex	
7	VII	septem	
8	VIII	octō	
9	IX	novem	
10	X	decem	
11	XI	ūndecim	
12	XII	duodecim	
13	XIII	tredecim	
14	XIV	quattuordecim	
15	XV	quīndecim	
16	XVI	sēdecim	
17	XVII	septendecim	
18	XVIII	duodēvīgintī	または octōdecim
19	XIX	ūndēvīgintī	または novendecim
20	XX	vīgintī	
21	XXI	ūnus et vīgintī	
22	XXII	duo et vīgintī	
27	XXVII	septem et vīgintī	
28	XXVIII	duodētrīgintā	
29	XXIX	ūndētrīgintā	

30	XXX	trīgintā
40	XL	quadrāgintā
50	L	quīnquāgintā
60	LX	sexāgintā
70	LXX	septuāgintā
80	LXXX	octōgintā
90	XC	nōnāgintā
98	XCVIII	octō et nōnāgintā
99	XCIX	ūndēcentum
100	C	centum
101	CI	centum et ūnus
126	CXXVI	centum vīgintī sex
161	CLXI	centum sexāgintā ūnus
200	CC	ducentī
300	CCC	trecentī
400	CD	quadringentī
425	CDXXV	quadringentōs vīgintī quīnque
500	D	quīngentī
600	DC	sescentī
700	DCC	septingentī
800	DCCC	octingentī
900	CM	nōngentī
1000	M	mīlle
2000	MM	duo mīlia
10000		decem mīlia
100000		centum mīlia

基数詞の性・格の変化について説明する。前述の通り、1・2・3 は特殊な変化をする。21, 42 など、1・2・3 が単語として出てくる数字は、その部分だけ変化する。次に 200・300・・・・900 は、第 1・第 2 変化形容詞の複数形と同じ性・格による変化をする。1000 は mīlle で不変化形容詞だが、2000・3000・・・・と mīlle が複数形 mīlia になると、第 3 変化中性名詞として格変化する（主格 mīlia 属格 mīlium 与格 mīlibus 対格 mīlia 奪格 mīlibus 呼格 mīlia)。mīlia だけは「中性名詞」なので、物の方を属格にして、例えば 5000 冊の本なら、「本の 5000」というように表現する。これまで述べたもの以外は不変化の形容詞である。

余談だが、Microsoft Office Excel では、ROMAN 関数を使うと普通の数字をローマ数字にして表示してくれる。一つ目の引数には変換したい数字を指定し、二つ目の引数には変換方法を指定するための数字（標準の変換方法が「0」であり、簡略版を指定したいときには「1」・「2」・「3」・「4」の 4 バージョンが用意されている）を指定する。

さて次に「序数詞」である。序数詞は、「1 番目の」「2 番目の」・・・を表す形容詞である。英語では first, second, ・・・に当たる。すべて第 1・第 2 変化をする。1～10 のみ以下に（男性単数主格のみ）示す。

1. prīmus
2. secundus
3. tertius
4. quārtus

5. quīntus
6. sextus
7. septimus
8. octāvus
9. nōnus
10. decimus

分数の表し方を一応説明しておく。分数には pars,partis f.「部分」という名詞を使う。

1. 分子が 1 のとき（e.g.　1/4　1/7）
   「分母の序数詞の女性単数形」＋「pars の単数形」
2. 分子が分母より 1 だけ少ないとき（e.g.　4/5　2/3）
   「分子の基数詞の女性複数形」＋「pars の複数形」
3. 1.でも 2.でもないとき（e.g.　2/7　5/9）
   「分子の基数詞の女性複数形」＋「分母の序数詞の女性複数形」

つまり、pars は基数詞（とそれに応じた pars の単複）により分子を表し、序数詞により分母を表すわけである。そして 1.では基数詞を省略、2.では序数詞を省略、3.では pars を省略しているわけである。

次に「配分数詞」である。これは「1 つずつの」「2 つずつの」・・・を表す形容詞である。「～ずつ」と言っている時点でそれは複数回行うことが決まっているので、全部では結局複数個になるから、複数形しかない。すべて第 1・第 2 変化形容詞の複数形と同じ変化をする。

以下に 1～10 の男性複数主格を示す。

1　singulī
2　bīnī
3　ternī　　または trīnī
4　quaternī
5　quīnī
6　sēnī
7　septēnī
8　octōnī
9　novēnī
10　dēnī

配分数詞には「～ずつの」の他にもう一つ用法がある。ラテン語には「形が複数で意味が単数」の名詞がたまにある。そういう名詞に「～つの」というのを付ける時には、基数詞の代わりに配分数詞を用いる。ただし、1 だけは配分数詞 singulī,-ae,-a ではなく基数詞 ūnus,-ae,-um の複数形 ūnī,-ae,-a を用いる（ūnus,-a,-um は代名詞的形容詞の変化をするが、複数形は普通の第 1・第 2 変化をする）。また、3 は必ず trīnī のほうを用いる。以上を踏まえると、たとえば「手紙」は litterae,-ārum f.だが、「1 通の手紙」は ūnae litterae、「2 通の手紙」は bīnae litterae、「3 通の手紙」は trīnae litterae となる。こういう名詞は往々にして単数形だと別の意味があり、littera,-ae f.は「文字」を意味する。つまり基数詞を用いて duo litterae と書けば「2 文字」の意味である。

最後に、「数副詞」である。これは「1 度」「2 度」・・・と回数を表す副詞である。英語の once, twice に当たる（が、英語には 3 以降はない。と思っていたら「3 度」は thrice というのがあるらしい）。これは副詞なので変化しようがない。1～10 までを示す。

1　semel
2　bis
3　ter

4　quater
5　quīnquiēs
6　sexiēs
7　septiēs
8　octiēs
9　noviēs
10　deciēs
※5 以降の語尾-ēs は-ēns とも。

数詞は以上で終える。ここで挙げなかった数の数詞は、文法書や辞書で探してもらいたい。

VIII 動詞（後編）

VIII-i 命令法

命令法は、いろいろと抜けている活用形が多い（基本的に 1 人称はない）。それに人称語尾とかもぐちゃぐちゃである。

命令法はすべて現在グループである。

命令法現在能動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	2 人称	-ā	-ē	-e	-e	-ī
複数	2 人称	-āte	-ēte	-ite	-ite	-īte

命令法現在受動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	2 人称	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
複数	2 人称	-āminī	-ēminī	-iminī	-iminī	-īminī

命令法未来能動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	2 人称	-ātō	-ētō	-itō	-itō	-ītō
	3 人称	-ātō	-ētō	-itō	-itō	-ītō
複数	2 人称	-ātōte	-ētōte	-itōte	-itōte	-ītōte
	3 人称	-antō	-entō	-untō	-iuntō	-iuntō

命令法未来受動態

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	2 人称	-ātor	-ētor	-itor	-itor	-ītor
	3 人称	-ātor	-ētor	-itor	-itor	-ītor
複数	2 人称					
	3 人称	-antor	-entor	-untor	-iuntor	-iuntor

命令法現在は、普通に命令を表す。なお「禁止」は、命令法に nōn を付けるのではなく、動詞 nōlō（IX-v を参照）を用いるか、接続法（VIII-vi を参照）を用いるので注意すること。

命令法未来は、法令・公的文書・人生訓などの形式ばった表現で用いられる。「禁止」の場合は、nē を付ける。

VIII-ii **不定法**

不定法は、「法」という名は付いているが、準動詞の一種であり、定動詞ではない。英語文法では「不定詞」と呼ばれることが多いが、ラテン語文法では「不定法」と呼ばれることが多い。

英語文法での「to 不定詞」は用法がたくさんあって、「名詞的用法」「副詞的用法」「形容詞的用法」とか分類されているが、ラテン語では名詞的用法しかない（そもそも英語の不定詞は to という前置詞をくっつけることで、さまざまな技能を習得したのではなかろうか。違うかもしれないけど）。

不定法は、現在・未来・現在完了のそれぞれに、能動態と受動態がある。

不定法現在（現在グループ）

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単	-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
能動態	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
受動態	-ārī	-ērī	-ī	-ī	-īrī

不定法未来（回説方式）

	すべて
能動態	未来能動分詞+esse
受動態	スピーヌム対格+īrī

※esse（sum の不定法現在能動態）や īrī（eō の不定法現在受動態）は語形変化しない。未来能動分詞は、不定法の主語に性・数・格を一致させる。「スピーヌム対格」は語形変化しない。

不定法現在完了（能動態：完了グループ、受動態：回説方式）

	すべて
能動態	-isse
受動態	完了受動分詞+esse

※esse（sum の不定法現在能動態）は語形変化しない。完了受動分詞は、不定法の主語に性・数・格を一致させる。

未来能動分詞は形容詞のはたらきをする準動詞の一つで、スピーヌムグループの活用形である。スピーヌム対格の語尾-um を、-ūrus,-ūra,-ūrum と変えればできあがる（見れば分かるが、第 1・第 2 変化をする）。

不定法は、「主格」または「前置詞の目的語でない対格」の中性単数名詞としてはたらくことができる。対格としてはたらく場合で「文自体の主語」と「不定法の主語」が異なるときには、「不定法の主語」を対格で添え

る（なお、不定法句の中の再帰代名詞は、「不定法の主語を指す場合」と「文自体の主語を指す場合」がある）。

不定法の時制は、「現在」は「定動詞と同時」、「未来」は「定動詞より後」、「現在完了」は「定動詞より前」を表し、定動詞との相対的な関係を表す。

また、定動詞の直説法現在完了や直説法未完了過去のかわりに、不定法現在を（定動詞として）用いることがある。これは物語や史記に多く、「歴史的不定法」という。「過去」のことなのに「不定法現在」が、用いられるので注意。

なお、デーポーネンティアの不定法は、現在と現在完了は受動態で作り、未来は能動態で作る。意味はすべて能動的になる。

VIII-iii **分詞**

分詞とは、形容詞のはたらきをする準動詞である。ラテン語の分詞は、「現在能動分詞」「完了受動分詞」「未来能動分詞」の 3 つである。まずは形から見ることにする。

現在能動分詞（現在グループ）

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単	-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
3 性単数主格	-āns	-ēns	-ēns	-iēns	-iēns
3 性単数属格	-antis	-entis	-entis	-ientis	-ientis

※現在能動分詞の変化は第 3 変化「1 語尾型」形容詞に近いが、子音幹と i 幹が混ざったような特殊な変化をするので、下表に示す。

		男性	女性	中性
単数	主格	※		
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		※
	奪格	-e (-ī)		
	呼格	※		
複数	主格	-ēs		-ia
	属格	-ium		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia
	奪格	-ibus		
	呼格	-ēs		-ia

※中性単数対格・3 性共通単数呼格は、3 性共通単数主格と等しい。

完了受動分詞（スピーヌムグループ）

	すべて
スピーヌム対格	-um
男性単数主格	-us
女性単数主格	-a
中性単数主格	-um

※「-us,-a,-um 型」の第 1・第 2 変化形容詞と同じ変化をする。

未来能動分詞（スピーヌムグループ）

	すべて
スピーヌム対格	-um
男性単数主格	-ūrus
女性単数主格	-ūra
中性単数主格	-ūrum

※「-us,-a,-um 型」の第 1・第 2 変化形容詞と同じ変化をする。

これら 3 つの分詞の用法について述べていく。まず大前提として覚えておいてほしいのは、「分詞は形容詞のはたらきをする」ということだ。変化の形式も形容詞と同じだし、「名詞を直接修飾する」「補語として用いる」「名詞のような働きをする」という形容詞の 3 用法は、分詞においてもあてはまる。ただ、分詞は動詞の活用形であるため、目的語をとったりもするので、ただの形容詞よりは少々複雑な文にはなるかもしれない。

現在能動分詞は「～する」「～している」、完了受動分詞は「～された」「～されてしまった」、未来能動分詞は「～する」「～するだろう」と訳しておけばだいたい大丈夫である。ただし、この「現在」「完了」「未来」というのは定動詞との関係において相対的な時を示すものであるので、注意すること。

なお、この 3 つには完了グループが含まれていないので、(「能動」という名の付いた 2 つも含めて）デーポーネンティアでも 3 つの分詞を作ることができる。デーポーネンティアにおいては、3 つとも「能動」の意味になる（ただし、一部例外がある)。また、デーポーネンティアの基本形に「スピーヌム対格」はない。「直説法現在完了受動態 1 人称単数」（sum+完了受動分詞）の完了受動分詞の語尾-us を-um に換えることによって、「スピーヌム対格」が（逆に）得られる。

また、一部の動詞（おもに自動詞）の完了受動分詞は、「完了能動」の意味になる。

VIII-iv **動名詞と動形容詞**

「動名詞」は名詞のはたらきをする準動詞、「動形容詞」は形容詞のはたらきをする準動詞である。

「動名詞」は「～すること」を表す。単数の中性名詞として扱う。主格はなく、属格～奪格が存在する。不定法が「主格」と「前置詞の目的語でない対格」としてはたらくのに対し、動名詞は「属格」「与格」「前置詞の目的語としての対格」「奪格」としてはたらく。

「動形容詞」は「～されるべき」「～されるにふさわしい」という受動的な意味を持ち、別名「未来受動分詞」とも呼ばれる。ただ、動形容詞にはもう一つ「動名詞の代用」としての用法があり、「O を V すること」という動名詞の構文を「V されるべき O」という動形容詞の構文に書き換えることがある（これは、ラテン語では動名詞が対格目的語をとることは、その動名詞が「属格」か「前置詞の後でない奪格」の場合のみ許されているからである)。そこで動形容詞の構文のなかには「V されるべき O」という訳ではなく「O を V すること」という訳をしなければいけない場合がある。

なお、デーポーネンティアにおいても動名詞・動形容詞は作ることができ、動名詞は「能動」を、動形容詞は「受動」を、それぞれ表す。

動形容詞は、3 性 2 数 6 格すべてそろっており、第 1・第 2 変化形容詞と同じ変化をする。動名詞は、動形容詞の変化形のうち中性単数属格～中性単数奪格と同形である。

動名詞

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単	-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
属格	-andī	-endī	-endī	-iendī	-iendī
与格	-andō	-endō	-endō	-iendō	-iendō
対格	-andum	-endum	-endum	-iendum	-iendum
奪格	-andō	-endō	-endō	-iendō	-iendō

動形容詞

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単	-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
男性単数主格	-andus	-endus	-endus	-iendus	-iendus
女性単数主格	-anda	-enda	-enda	-ienda	-ienda
中性単数主格	-andum	-endum	-endum	-iendum	-iendum

※他の「数」・「格」も、第 1・第 2 変化形容詞と同じ変化をする。

デーポーネンティアにおいても、一般の動詞と同じ作り方で動名詞・動形容詞をつくることができる。なお、動名詞は能動の意味、動形容詞は受動の意味になるので注意が必要である。

最後に名称の話をしておく。「動名詞」はラテン語で gerundium という（英語では gerund という）。そして「動形容詞」はラテン語で gerundīvum という（紛らわしいので注意が必要である）。「動名詞」は（英語文法での用語も含めて）日本で定着した文法用語であるが、「動形容詞」は別名がいろいろあるので注意が必要である（例として、先ほどの「未来受動分詞」や、「受動形容詞」「所相的形容詞」など）。また、それぞれカタカナで「ゲルンディウム」「ゲルンディーウゥム」と書いてある場合もある（が、やはり紛らわしい）。

VIII-v **スピーヌム**

「スピーヌム」というのは、正確には名詞のはたらきをする準動詞である。しかし事実上は、副詞のはたらきをすると思っていてもらって差し支えない。いちおうは第 4 変化をする男性単数名詞ということになっているが、対格と奪格の 2 形しか残っていない。

「スピーヌム」はラテン語名 supīnum そのままであるが、日本語では「目的分詞」と訳すことが多い。しかしスピーヌムは形容詞のはたらきをするわけではないから「分詞」という訳はあまりよくないかもしれない。また、「スピーヌム」や「supīnum」と表記している文法書も少なくない。

	すべて
スピーヌム対格	-um
対格	-um
奪格	-ū

用法について。「対格」は、運動を表す動詞（「行く」や「来る」など）が定動詞のときに、「～するために」「～しに」を表す。「奪格」は感情・判断・可能性を表す形容詞（「難しい」や「快い」や「恐ろしい」など）につけて用いられ、「～するのに」「～することにおいて」を表す。

デーポーネンティアのスピーヌムも普通の動詞と同様に作られる。ただし、デーポーネンティアの基本形に「スピーヌム対格」はないので、「直説法現在完了受動態 1 人称単数」（sum+完了受動分詞）の完了受動分詞の語尾 -us を-um に換えて「スピーヌム対格」を得なければならない。

VIII-vi **接続法**

さて、動詞のラスボスは「接続法」である。本来の文法書なら接続法に入ってからで文法書の後ろ半分くらいを使うのだが、私はそこまで詳しくないし、自分で作文をしない人には難しいことを言ってもしかたがないので、さらっと済ませてしまう。ちなみに、英語文法の「仮定法」にあたる（ラテン語文法の「接続法」も英語文法の「仮定法」も、英語では subjunctive という）。まずは活用表から。接続法には、直説法から「未来」「未来完了」を除いただけの活用形がある。

接続法現在能動態（現在グループ）

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-em	-eam	-am	-iam	-iam
	2 人称	-ēs	-eās	-ās	-iās	-iās
	3 人称	-et	-eat	-at	-iat	-iat
複数	1 人称	-ēmus	-eāmus	-āmus	-iāmus	-iāmus
	2 人称	-ētis	-eātis	-ātis	-iātis	-iātis
	3 人称	-ent	-eant	-ant	-iant	-iant

接続法過去能動態（現在グループ）

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-ārem	-ērem	-erem	-erem	-īrem
	2 人称	-ārēs	-ērēs	-erēs	-erēs	-īrēs
	3 人称	-āret	-ēret	-eret	-eret	-īret
複数	1 人称	-ārēmus	-ērēmus	-erēmus	-erēmus	-īrēmus
	2 人称	-ārētis	-ērētis	-erētis	-erētis	-īrētis
	3 人称	-ārent	-ērent	-erent	-erent	-īrent

接続法現在受動態（現在グループ）

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-er	-ear	-ar	-iar	-iar
	2 人称	-ēris	-eāris	-āris	-iāris	-iāris
	3 人称	-ētur	-eātur	-ātur	-iātur	-iātur
複数	1 人称	-ēmur	-eāmur	-āmur	-iāmur	-iāmur
	2 人称	-ēminī	-eāminī	-āminī	-iāminī	-iāminī
	3 人称	-entur	-eantur	-antur	-iantur	-iantur

接続法過去受動態（現在グループ）

		第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単		-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能		-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
単数	1 人称	-ārer	-ērer	-erer	-erer	-īrer
	2 人称	-ārēris	-ērēris	-erēris	-erēris	-īrēris
	3 人称	-ārētur	-ērētur	-erētur	-erētur	-īrētur
複数	1 人称	-ārēmur	-ērēmur	-erēmur	-erēmur	-īrēmur
	2 人称	-ārēminī	-ērēminī	-erēminī	-erēminī	-īrēminī
	3 人称	-ārentur	-ērentur	-erentur	-erentur	-īrentur

接続法現在完了能動態（完了グループ）

		すべて
直現完能 1 単		-ī
単数	1 人称	-erim
	2 人称	-eris
	3 人称	-erit
複数	1 人称	-erimus
	2 人称	-eritis
	3 人称	-erint

接続法過去完了能動態（完了グループ）

		すべて
直現完能 1 単		-ī
単数	1 人称	-issem
	2 人称	-issēs
	3 人称	-isset
複数	1 人称	-issēmus
	2 人称	-issētis
	3 人称	-issent

現在時制は、直説法と微妙に違うだけである。また全体的に人称語尾は直説法と同じである。ボーっとしていると普通に直説法だと思ってしまうので、毎回しっかり細部まで注意すること。

さて、用法の話へ移る。「直説法」が「何も含意しない単なる事実」であるのに対し、「接続法」は「何らかを含意している主観的なこと」というのが基本的な違いである。接続法が含意することは多岐にわたる。また現実には、強制的に接続法にさせられる状況というのもある。

接続法が使われる状況には、大きく分けて「A. 独立文で使われる場合」と「B. 従属節中で使われる場合」がある。用法を以下に箇条書きで列挙していく（ただし、説明はかなり端折ってしまっている）。はじめに述べたとおり、本来接続法の用法というのは、例文などを使って真面目に勉強しなければならないものなのだが、本書は全体の概観を目的としているので、ここでは大ざっぱな列挙にとどめる。文章を読んでいて接続法が出てきたら、以下の用法列挙を見た上で、それでよく分からないときは、大きな文法書を参照して例文などを読んでみてほしい。

以下、我々の普段使う意味での「現在」「過去」という語は「<現在>」「<過去>」と<>付きで表し、時制名としての「現在」「過去」（特に記号を付けない）と区別することにする。

A. 独立文で使われる場合

1. 勧誘「～しよう」{現在 1 人称複数。}
2. 警告「～しないことだ」{否定の副詞 nē とともに。現在 2 人称単数。}
3. 禁止「～するな」{否定の副詞 nē とともに。命令法の否定。現在完了 2 人称。}
4. （3 人称への）命令「～すべきだ」{現在 3 人称。禁止には nē。}
5. 可能性「～かもしれない」「～だろう」{<現在>には現在または現在完了で単数。<過去>には過去 2・3 人称単数。否定には nōn。}
6. 懐疑・思案・憤懣「～しようか」「なんで～だろう」{<現在>には現在、<過去>には過去。1 人称。まれに 3 人称。否定には nōn。}
7. 非現実「～のはずだった」{<現在>には過去、<過去>には過去完了。否定には nōn。}
8. 実現可能な願望「～したいものだ」{<現在>には現在、<過去>には完了。願望を表す副詞が伴うことがある。否定には nē。}
9. 実現不可能な願望「～だったらいいのに」{<現在>には過去、<過去>には過去完了。願望を表す副詞が伴う。否定には nē。}
10. 譲歩「～としても」{<現在>には現在、<過去>には完了。否定には nē。}

B. 従属節中で使われる場合（使う時制については後述）

1. 間接疑問文｛疑問詞や-ne などはそのままで間接疑問文を作れる。また、接続詞 sī「～かどうか」や an「～ないかどうか」や quin「～ことを」の節でも（これらの接続詞は用法が限定されている。詳細は省略）。}
2. 目的文（要求・配慮が主節）{接続詞 ut「～ように」「～ことを」の節で。}
3. 目的文（恐怖が主節）{接続詞 nē の節で「～のではないかと」。否定は nōn で「～ないのではないかと」（nē 節+nōn に代えて ut 節も可）。}
4. 目的文（妨害・拒絶が主節）{nē 節または quōminus 節で「～しないように」。主節が否定や疑問の時はたいてい quin 節で。}
5. 目的文（副詞節）{ut 節「～ために」「～ように」や nē 節「～ないように」「～ないために」や quō 節「いっそう～ように」の中で。}
6. 結果文（名詞節）{ut 節「～ということが（を）」で。否定は nōn。}
7. 結果文（副詞節）{ut 節「（主節）ので（ut 節）」「（従属節）ほど（主節）」で。否定は nōn。}
8. 結果文（副詞節）{quin 節「（従属節）ないほど（主節）」「（主節）で（従属節）～ない」で。主節が否定の時のみ。}
9. 結果文（副詞節）{主節中に比較級があるときの quam ut 節「あまりに（主節）なので（従属節）しない」「（従属節）しないほど（主節）」「（従属節）するくらいならむしろ（主節）」で。}
10. 説明｛ut 節。主節中の名詞・代名詞の内容を説明する。}
11. cum 節や quod 節などの一部｛接続詞は、意味・用法によって、直説法と取る場合と接続法を取る場合とが決まっている。辞書で確認のこと。}
12. 可能的条件文｛sī「もし～なら」の節の中で。（事実の条件文は直説法。）<現在>には現在または現在完了、<過去>には過去。否定は sī を nisi または nī へ。主節も接続法に。}
13. 非現実条件文｛sī「もし～なら」の節の中で。<現在>には過去、<過去>には過去完了。否定は sī を nisi または nī へ。主節も接続法に。時制の扱いも同様。}
14. 条件的願望文｛dum,modo,dummodō 節「～しさえすれば」で。否定は nē を付す。}
15. 譲歩文｛ut,quamvīs,licet 節「～としても」で。帰結は直説法。また、etsī,etiamsī,tametsī 節「～としても」のうち非現実・可能性の場合で。こちらは帰結も接続法。}

16. 仮想的比較文｛ut sī 節など「あたかも～のごとく」の節で｝
17. 目的・結果・理由・譲歩を含意する関係代名詞節
18. 可能性や非現実の関係代名詞節
19. 主節が接続法のときの関係代名詞節（直説法の場合もある）
20. 直接話法の従属節が間接話法に直された時

B.において使用される時制には、次の原則がある。

主節が、現在・未来・未来完了のとき

主節と「同時」なら、現在

主節の「以前」なら、現在完了

主節の「以後」なら、「sum の接続法現在」+「未来能動分詞」

（「以後」は間接疑問文の能動態のみで、それ以外は「同時」で代用する）

主節が、現在完了・過去・過去完了のとき

主節と「同時」なら、過去

主節の「以前」なら、過去完了

主節の「以後」なら、「sum の接続法過去」+「未来能動分詞」

（「以後」は間接疑問文の能動態のみで、それ以外は「同時」で代用する）

しかしこれらはあくまで原則であり、用法によっていろいろと例外はある。詳細は文法書を参照してほしい。

IX 補遺

IX-i 叙述同格と絶対奪格構文

ここで「叙述同格」と呼ぶ文法事項は、決定的な文法名は決まっておらず、いろいろな名前で呼ばれている。各々好きな名前で呼んでもらってよい。

「叙述同格」とは、名詞または形容詞または分詞を、文中に存在する名詞・代名詞（省略された主語も可）と同性・同数・同格にして置くことにより、さまざまなことを含意する述語的機能を果たすことができるという構文である。

普通、同格で名詞 N と名詞 M があったら、「N の M」とか「N である M」とか「N という M」とかと訳す。例えば、Professor Kinoshita とあったら、「木下という教授」という意味だろう。

また、普通、名詞を形容詞や分詞で修飾する場合には、形容詞や分詞はその名詞に同性・同数・同格で置かれる。よって、普通、名詞と形容詞（または名詞と分詞）が同格になっていたら、「A な N」と訳すだろう。

しかし、これらはあくまで「普通」の訳し方であり、それがすべてではない。それがこの「叙述同格」の訳し方である。

「叙述同格」として訳すときには、「メインの名詞が主語であり、付いている名詞や形容詞や分詞が sum の述語である、「時」「原因・理由」「付帯状況」「条件」「譲歩」などを含意する副詞節」のように訳すのである。

ラテン語の例文を作ると読むのが嫌になるので、英語で例文を挙げる。The man running in the park found this shop.という文は、「普通」に訳せば、「公園を走っていたその男はこの店を見つけた。」となる。しかし（英語では普通こういう訳し方はしないけれど）「叙述同格」として訳してみると、「その男は公園を走っていたときにこの店を見つけた。」とか「その男は公園を走りながらこの店を見つけた。」とかとなる。また、*My father a college student studied Chinese.というような文（これは英語では非文である）は「私の父は、大学生のときに中国語を学んだ」とか「私の父は、大学生だったのに中国語を学んだ」とか「私の父は、大学生だったので中国語を学んだ」とかと訳すことになるわけである。

現代英語では、主格の名詞に対する「叙述同格」（と同じ構文）だけが存在しており、最初の例は Running in the park, the man found this shop.とか The man found this shop, running in the park.とすれば「叙述同格」的な訳し方ができ、これを英語文法では「分詞構文」と呼んでいる。ラテン語文法でも「分詞構文」と呼ぶ人もいるが、英語文法のように「分詞句の主語」＝「文の主語」だとは限らないし、分詞ではない形容詞や名詞がくる場合もある（これは英語でもあるけど）ので、ここではあえて「叙述同格」という語を用いることにした。

ラテン語では、主文中のどんな名詞・代名詞でも「叙述同格」の主語にできる分、英語よりは自由度は高いが、それでも主文中に出てこない名詞・代名詞を主語にした「叙述同格」は作ることができない。それを解決するための構文が「独立奪格構文」である。

「独立奪格構文」とは、「叙述同格」を作りたいがその主語が主文中にないとき、叙述同格の主語を強引に主文中に奪格でおいてしまってそれに「叙述同格」を作ろう、という構文である。「奪格」というのは様々な意味を含んでおり、わりと何でもありな感じがする。「独立奪格構文」のために主文中に置かれた奪格の名詞は、主文に対してなんら影響を持たず、「叙述同格」の主語としてはたらくためだけに存在する（よって、奪格としての訳（「分離の奪格」とか「時の奪格」とか・・・）は行われない）。奪格の名詞とその述語となる語たちが主文からはたらきの上で独立しているので、「独立奪格構文」と呼ばれる。これも定まった名称ではなく、文法書によって微妙に異なる。英語では ablative absolute と呼ばれる。

ちなみに英語では、分詞構文の主語は（奪格ではなく）主格で置かれる（このような構文は「独立分詞構文」と呼ばれる）。

「叙述同格」「独立奪格構文」は、ラテン語で好んでよく用いられる。英語と違って語順がわりと自由でしっちゃかめっちゃかしているのに、これでさらに複雑になる。また「叙述同格」に関しては「普通」の訳し方をするか、「叙述同格」の訳し方をするかは、読み手が文脈から判断しなければならない場合が多い。ラテン語は、文法の暗記事項が多いけれど、すべてがシステマティックなわけではなく、文脈からうまく訳さなければならない部分もあるということは覚えておかなければならない。

また、「叙述同格」や「独立奪格構文」では、どう考えても「A が B を V する」と訳したほうが自然なのに直訳は「B が A に V される」と受動の表現になっていることがある。逆もある。能動や受動は（意味が逆になってしまってはダメだが）入れ替えて訳すほうが自然な場合は、入れ替えて訳すべきである。例えば、「A さんが会われた後、B さんは C へ向かった。」というような文があったとしても、「B さんは、A さんに会った後、C へ向かった。」と訳すべきである。

なお、「叙述同格は、いつも「名詞＋分詞」で作られるものであり、「名詞＋名詞」や「名詞＋形容詞」の場合は sum の現在能動分詞が省略されているのである」という考え方もある。sum は現在能動分詞を持たない（現在能動分詞という活用形を欠く）動詞なので、この説明も筋は通る。この考え方でいくと「分詞構文」と呼ぶのも一理ある。

IX-ii 英語の文法用語

文法用語は、英語版も覚えておいた方がなにかと役に立つ。

例えばオンラインの羅英辞典 http://perseus.uchicago.edu/には活用形検索の機能がついていたりして便利なのだが、検索結果はもちろん英語なので、ある程度文法用語を知らないとどうしようもない。例えば、「amaveras」と入力する（これは長音符を抜いてある）と、amo の「pluperfect active indicative 2 sg.」と表示される。「active」＝「能動態」と「2」＝「2 人称」は想像つくだろうが、残りは知らないとどうしようもない。ちなみに「pluperfect」＝「過去完了」、「indicative」＝「直説法」、「sg.」＝「singular」＝「単数」である。

英語の文法用語の多くはラテン語の文法用語を起源としているから、ラテン語の文法用語も見ればだいたい分かるようになる。例えば、「接続法」は英語で subjunctive、ラテン語で subjunctīvus である。

以下に一覧を挙げるから、参考にしてほしい。発音は米音を（複数あるものは一つを選んで）示した。

品詞	part of speech /pɑ́:rt əv spí:ʧ/
名詞	noun /náʊn/
代名詞	pronoun /próʊnaʊn/
形容詞	adjective /ǽʤɪktɪv/
動詞	verb /və́:rb/
副詞	adverb /ǽdvə:rb/
前置詞	preposition /prèpəzíʃən/
接続詞	conjunction /kənʤʌ́ŋkʃən/
間投詞	interjection /ìntərʤékʃən/
接頭辞	prefix /prí:fɪks/
接尾辞	suffix /sʌ́fɪks/
節	clause /klɔ́:z/
句	phrase /fréɪz/
語	word /wə́:rd/
人称の	personal /pə́:rsənl/
再帰の	reflexive /rɪfléksiv/
指示の	demonstrative /dɪmɑ́:nstrətɪv/
疑問の	interrogative /ìntərɑ́:gətɪv/
関係の	relative /rélətɪv/
不定の	indefinite /ɪndéfənət/
格	case /kéis/
主格	nominative /nɑ́:mənətɪv/
属格	genitive /ʤénətɪv/
与格	dative /déɪtɪv/
対格	accusative /əkjú:zətɪv/
奪格	ablative /ǽblətɪv/
呼格	vocative /vɑ́:kətɪv/
性	gender /ʤéndər/
男性	masculine /mǽskjəlɪn/
女性	feminine /fémənɪn/
中性	neuter /n(j)ú:tər/
通性	common /kɑ́:mən/
数	number /nʌ́mbər/
単数	singular /síŋgjələr/
複数	plural /plúərəl/
級	degree /dɪgrí:/
原級	positive /pɑ́:zətɪv/
比較級	comparative /kəmpérətɪv/
最上級	superlative /su(:)pə́:rlətɪv/
他動詞	transitive verb /trǽnsətɪv və́:rb/
自動詞	intransitive verb /ɪntrǽnsətɪv və́:rb/
規則動詞	regular verb /régjələr və́:rb/

不規則動詞	irregular verb /ɪrégjələ*r* və́:*r*b/
法	mood /mú:d/
直説法	indicative /ɪndíkətɪv/
接続法	subjunctive /səbʤʌ́ŋ*k*tɪv/
命令法	imperative /ɪmpérətɪv/
時制	tense /téns/
現在	present /préznt/
過去	imperfect / ɪmpə́:*r*fɪkt /　（ラテン語の「過去」）
未来	future /fjú:ʧə*r*/
現在完了	perfect /pə́:*r*fɪkt/　（ラテン語の「現在完了」）
過去完了	pluperfect /plù:pə́:*r*fɪkt/　（past perfect /pǽst pə́:*r*fɪkt/ とも）
未来完了	future perfect /fjú:ʧə*r* pə́:*r*fɪkt/
態	voice /vɔ́ɪs/
能動態	active /ǽktɪv/
受動態	passive /pǽsɪv/
人称	person /pə́:*r*sn/
一人称	first person /fə́:*r*st pə́:*r*sn/
二人称	second person /sékənd pə́:*r*sn/
三人称	third person /θə́:*r*d pə́:*r*sn/
不定法	infinitive /ɪndéfənət/
現在能動分詞	present active participle /préznt ǽktɪv pɑ́:*r*təsìpl/
完了受動分詞	perfect passive participle /pə́:*r*fɪkt pǽsɪv pɑ́:*r*təsìpl/
未来能動分詞	future active participle /fjú:ʧə*r* ǽktɪv pɑ́:*r*təsìpl/
動名詞	gerund /ʤérənd/
動形容詞	gerundive /ʤərʌ́ndɪv/
スピーヌム	supine /sú:paɪn/
変化	declension /dɪklénʃən/
活用	conjugation /kɑ̀:nʤəgéɪʃən/
独立奪格構文	ablative absolute /ǽblətɪv ǽbsəlù:t/

IX-iii **ローマ人の名前**

ローマ人の名前について。ローマ人男子の名前は、「個人名」「氏族名」「家名」の順に 3 語で構成される。日本でもまあ有名なキケロの例では、本名は Mārcus Tullius Cicerō であり、「Tullius 族の Cicerō 家の Mārcus さん」という意味である。ただし、尊称が与えられて後ろにもう 1 単語以上つく場合もある。

ちなみに「個人名」はレパートリーが少なく、以下に示す 15 でほぼ全部である。それぞれに略記がある。

A.	Aulus	App.	Appius	C.	Gāius	Cn.	Gnaeus
D.	Decimus	L.	Lūcius	M.	Mārcus	M'.	Mānius
P.	Pūblius	Q.	Quīntus	Ser.	Servius	Sex. (S.)	Sextus
S.	Spurius	T.	Titus	Ti.	Tiberius		

もちろん固有名詞もすべて数・格による変化をする。ここに挙げたのはすべて単数主格である。M.と書いてあるからといって Mārcus の略とは限らない。単数属格なら Mārcī の略だし、単数対格なら Mārcum の略である（Mārcus は第 2 変化男性名詞である）。略記されるのは個人名だけだから、読むときには、氏族名と家名か

ら格を判断して、略記された個人名も格変化させて読まなければならない。

ローマ人女子は、氏族名を女性形にして、それだけで名乗った（のちに家名も付け加えられるようになった）。例えばキケロの娘は Tullia という（キケロは Tullius 族である）。

なお、Gāius や Gnaeus が C.や Cn.と略記されるのは、かつて（古典期より前）G の文字がまだなかった時代に、C が[g]の音を表していたことによる。その時代は C が[g]で K が[k]と役割分担されていた。のちに G が作られて[g]の音価を持つとともに、C は[k]の音価を持つようになって、K が（Kalendae,-ārum f.「ついたち」を除いて）使われなくなっていったのである。

IX-iv ギリシア語系の名詞

名詞の中にはギリシア語から移入された名詞があり、そのうちの一部は、ギリシア語の名詞の変化に近い特殊な変化をするものがある。特に固有名詞はそうである。これらはあまり出てこないので本書では省略するが、文法書や辞書には変化表がたいてい載っているので、出てきたらそれらを参照されたい。

IX-v 活用形の一部を欠く動詞・不規則変化動詞・不規則変化名詞

動詞の中には、活用形の一部が欠けているものもある。それらの中には「直説法現在能動態 1 人称現在」を欠いてしまっているものもあり、そういう動詞の場合は辞書の見出し形が変わるので注意が必要である。

具体的にはまず、自然現象などを表す「非人称動詞」というのがある。これは基本的に 3 人称しかない（自然現象を表す動詞は基本的には主語を書かない）。例えば「雨が降る」という動詞は辞書に pluit,-ere,plūvit(pluit) とある。これは「直説法現在能動態 3 人称単数→不定法現在能動態→直説法現在完了能動態 3 人称単数」の順番である。また非人称動詞には、自然現象を表す動詞のほかに、感情を表す動詞や状況を表す動詞などもある（これらの動詞は用法が複雑で注意が必要であるが、本書では省略する）。非人称動詞の場合、辞書によっては強引に 1 人称の形を作り出して「直説法現在能動態 1 人称単数」を見出しにしているものもある。いずれにせよ、まあどうせ語尾しか変わらないので、臨機応変に対応できるだろう。

次に、完了系の時制（現在完了・過去完了・未来完了）しかもたない動詞というのがある。例えば meminī,-isse という動詞があるが、これは辞書見出し形が「直説法現在完了能動態 1 人称単数」で、その後ろに「不定法現在完了能動態」が付記されている。この動詞は現在完了で「覚えている」という意味で、もともと現在形では「覚える」「記憶する」という意味だったものの現在形が失われてしまったものだと思われる。このように完了形の時制しか持たない動詞は、meminī のほかにもいくつかある。

以上述べたもの以外にも、活用形の一部を欠く動詞はいくつかあるが、本書では割愛する。

次に、不規則変化動詞を見ていく。一つずつ軽く見ていく。活用形（本書では一部のみ掲載）は、「1 単,2 単,3 単,1 複,2 複,3 複」の順である。

sum,esse,fuī （スピーヌムなし）「～である、ある、いる（英：be）」

英語で言う be 動詞である。これは、直説法現在能動態は暗記したい（めちゃくちゃ不規則なのはこれだけ）。他も雰囲気は覚えよう。そして-sum で終わる複合動詞は意外に多い（例えば、adsum「出席している」や dēsum「欠けている」など）ので要注意。

直説法現在能動態：sum,es,est,sumus,estis,sunt

直説法過去能動態：eram,erās,erat,erāmus,erātis,erant

直説法未来能動態：erō,eris,erit,erimus,eritis,erunt

直説法現在完了能動態：fuī,fuistī,fuit,fuimus,fueris,fuerit

直説法過去完了能動態：fueram,fuerās,fuerat,fuerāmus,fuerātis,fuerant

直説法未来完了能動態：fuerō,fueris,fuerit,fuerimus,fueritis,fuerint

接続法現在能動態：sim,sīs,sit,sīmus,sītis,sint

不定法現在能動態：esse

現在能動分詞・完了受動分詞：なし

未来能動分詞：futūrus,-a,-um　　（他の活用形は省略）

possum posse potuī　（スピーヌムなし）「できる」

基本的に pot-に sum を足せばできあがる（例外もたくさんあるけど）。ただし、s にくっつくと pot-は pos-になる。目的語に動詞の不定法（対格のはたらき）をとることが多い。

直説法現在能動態：possum,potes,potest,possumus,potestis,possunt

（他の活用形は省略）

eō īre iī[īvī] itum　「行く」

これはわりと出てくるので気をつけよう。そして-eō で終わる複合動詞はわりとある（例えば、abeō「去る」や pereō「滅びる」など）ので、そのことを心に留めておくこと。

直説法現在能動態：eō,īs,it,īmus,ītis,eunt

直説法過去能動態：ībam,ībās,ībat,ībāmus,ībātis,ībant

直説法未来能動態：ībō,ībis,ībit,ībimus,ībitis,ībunt

接続法現在能動態：eam,eās,eat,eāmus,eātis,eant

命令法現在能動態 2 人称単数：ī

現在能動分詞：iēns　　（他の活用形は省略）

volō velle voluī　（スピーヌムなし）「欲する」

あんまり出てこないけど、存在は知っておこう。

直説法現在能動態：volō,vīs,vult,volumus,vultis,volunt

接続法現在能動態：velim,velīs,velit,velīmus,velītis,velint

（他の活用形は省略）

nōlō nōlle nōluī　（スピーヌムなし）「欲しない」

vōlō の兄弟。目的語に不定法をとって命令法にすると、「～することを欲するな」すなわち「～するな」という禁止を表すことができる（禁止は接続法でも表せる）。

直説法現在能動態：nolō,(nōn vīs),(nōn vult),nōlumus,(nōn vultis),nōlunt

命令法現在能動態 2 人称単数：nōlī　　（他の活用形は省略）

mālō mālle māluī　（スピーヌムなし）「むしろ欲する」

vōlō の兄弟。あんまり出てこない。これ自身に比較級のような意味があり、「～よりも」には（比較級の時と同じく）接続詞 quam を用いる。

直説法現在能動態：mālō,māvīs,māvult,mālumus,māvultis,mālunt

（他の活用形は省略）

ferō ferre tulī lātum　「運ぶ、耐える」

まあたまに出てくる。複合動詞がけっこう多いので注意。完了グループは tul-となるので注意。

直説法現在能動態：ferō,fers,fert,ferimus,fertis,ferunt

直説法現在完了能動態：tulī,tulistī,tulit,tulimus,tulistis,tulērunt

命令法現在能動態 2 人称単数：fer　　（他の活用形は省略）

fīō fierī　（完了形・スピーヌムなし）「なる、作られる」

faciō,-ere,fēcī,factum「作る、～にする」の受動態のような動詞である。完了グループの活用形は存在せず、必要ならば faciō の受動態の完了グループが補う。

直説法現在能動態：fīō,fīs,fit,fīmus,fītis,fiunt

（直説法現在完了能動態：factus sum,factus es,・・・）　　（他の活用形は省略）

不規則変化動詞は他にもあるにはあるのだが、とりあえず知っておくべきは以上である。ここに掲載しなかった活用形やその他の不規則変化動詞は、辞書や詳説文法書を参照してほしい。

ちなみに、「規則変化動詞」「不規則変化動詞」は単に「規則動詞」「不規則動詞」ともいう。

次に、不規則変化名詞について触れる。変化形の一部が欠けているものなどはたくさんあるが、すべてを挙げるのはキリがないので、有名な不規則変化名詞のみ変化表を以下に挙げる。

dea,-ae f.「女神」　と　filia,-ae f.「娘」

第 1 変化女性名詞だが、複数与格および複数奪格のみ不規則。

	単数	複数
主格	-a	-ae
属格	-ae	-ārum
与格	-ae	-ābus
対格	-am	-ās
奪格	-ā	-ābus
呼格	-a	-ae

deus,-ī m.「神」

第 2 変化男性名詞だが、ところどころが不規則。単数呼格 deus は要注意。

	単数	複数
主格	deus	deī か dī か diī
属格	deī	deōrum か deum
与格	deō	deīs か dīs か diīs
対格	deum	deōs
奪格	deō	deīs か dīs か diīs
呼格	deus か dīve	deī か dī か diī

vir,virī m.「男」

語尾が-ir なのに第 2 変化「-er,-erī 型」の変化をする。「-er,-erī 型」の変化表の-e-を-i-に換えればよい。

	単数	複数
主格	vir	virī
属格	virī	virōrum
与格	virō	virīs
対格	virum	virōs
奪格	virō	virīs
呼格	vir	virī

vīs(,vīs) f.「力、暴力」

第 3 変化に分類されるが、やや不規則。

	単数	複数
主格	vīs	vīrēs
属格	(vīs)	vīrium
与格	(vī)	vīribus
対格	vim	vīrīs(vīrēs)
奪格	vī	vīribus
呼格	vīs	vīrēs

domus,-ūs f.「家」

第 4 変化に属するが、ところどころ第 2 変化が混ざる。ただし女性名詞なので注意。

	単数	複数
主格	domus	domūs
属格	domūs	domuum か domōrum か domum
与格	domuī	domibus
対格	domum	domūs か domōs
奪格	domō	domibus
呼格	domus	domūs

※なお、単数地格は domī である（地格に関しては II-v を参照のこと）。

nēmō,nūllīus m.f.「だれも～ない」

代名詞に分類されることもある。第 3 変化。

	単数
主・呼格	nēmō
属格	nūllīus
与格	nēminī
対格	nēminem
奪格	nūllō (m.)　nūllā (f.)

nihil,nullius reī n.「何も～ない」

	単数
主・呼格	nihil
属格	nūllīus reī
与格	nūllī reī
対格	nihil
奪格	nūllā rē

IX-vi **参考文献**

『標準ラテン文法』中山恒夫　白水社　1987 年

『新ラテン文法』松平千秋／国原吉之助　東洋出版社　1992 年　（初版：南江堂　1968 年）

『ラテン語のはなし―通読できるラテン語文法』逸身喜一郎　大修館書店　2000 年

『Lessons in Latin parsing: containing the outlines of the Latin grammar, divided into short portions, and exemplified by appropriate exercises in parsing』Chauncey Allen Goodrich　Durrie & Peck　1832 年

『A Practical Grammar of the Latin Language; with Perpetual Exercises in Speaking and Writing: For the Use of Schools, Colleges, and Private Learners』George J. Adler　Sanborn, Carter, Bazin & Company 1858 年

『LEXICON LATINO-JAPONICUM Editio Emendata　羅和辞典＜改訂版＞』水谷智洋　研究社　2009 年

『ジーニアス英和辞典　第 4 版』　大修館書店　2006 年

『グローバルワイド　最新世界史図表　五訂版（改訂 16 版）』第一学習社編集部　第一学習社　2011 年

「Perseus under PhiloLogic Home」　URL　http://perseus.uchicago.edu/

「Wiktionary, the free dictionary」　URL　http://en.wiktionary.org/wiki/Wiktionary:Main_Page

「Wikipedia, the free encyclopedia」　URL　http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page

IX-vii **変化・活用表**

本書で示した変化・活用表をまとめて示す。

＜名詞＞（規則変化名詞のみ）

第 1 変化

	単数	複数
主格	-a	-ae
属格	-ae	-ārum
与格	-ae	-īs
対格	-am	-ās
奪格	-ā	-īs
呼格	-a	-ae

第 2 変化

(1)単数主格が-us で終わる名詞（ほとんどは男性名詞）

	単数	複数
主格	-us	-ī
属格	-ī	-ōrum
与格	-ō	-īs
対格	-um	-ōs
奪格	-ō	-īs
呼格	-e	-ī

※単数主格が-ius で終わる名詞ではたいてい、-ius（単数主格）に対して単数属格と単数呼格が-ī となる。例を挙げると、単数主格 Horātius、単数属格 Horātī、単数呼格 Horātī。

(2)単数主格が-um で終わる名詞（すべて中性名詞）

	単数	複数
主格	-um	-a
属格	-ī	-ōrum
与格	-ō	-īs
対格	-um	-a
奪格	-ō	-īs
呼格	-um	-a

※単数主格が-ium で終わる名詞ではたいてい、-ium（単数主格）に対して単数属格が-ī となる。

(3)単数主格が-er で終わる名詞（すべて男性名詞）

	単数	複数
主格	-er	-erī
属格	-erī	-erōrum
与格	-erō	-erīs
対格	-erum	-erōs
奪格	-erō	-erīs
呼格	-er	-erī

※単数主格および単数呼格以外では-e-が落ちるタイプの変化をする名詞もある。そういうものは基本形が-er,-rī となる。

第 3 変化

(1)子音幹名詞

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	※	-ēs	※	-a
属格	-is	-um	-is	-um
与格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
対格	-em	-ēs	※	-a
奪格	-e	-ibus	-e	-ibus
呼格	※	-ēs	※	-a

※単数主格は不規則。そして、単数呼格は単数主格と等しい。中性名詞においてはさらに、単数対格も単数主格と等しい。

(2)混合 i 幹名詞

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	※	-ēs	※	-a
属格	-is	-ium	-is	-ium
与格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
対格	-em	-ēs(-īs)	※	-a
奪格	-e	-ibus	-e	-ibus
呼格	※	-ēs	※	-a

※単数主格は不規則。そして、単数呼格は単数主格と等しい。中性名詞においてはさらに、単数対格も単数主格と等しい。

(3)純粋 i 幹名詞

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	-is	-ēs	※	-ia
属格	-is	-ium	-is	-ium
与格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
対格	-im	-īs(-ēs)	※	-ia
奪格	-ī	-ibus	-ī	-ibus
呼格	-is	-ēs	※	-ia

※中性名詞では、単数主格は数種類ある。そして単数主格＝単数対格＝単数呼格。

＊子音幹・混合 i 幹・純粋 i 幹の基本的な見分け方

☆男性名詞・女性名詞

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が 1 つ　　子音幹

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が複数　　混合 i 幹（まれに子音幹）

◎等数音節語で単数主格が-is や-ēs で終わる　　混合 i 幹（ただし以下の 2 種類を除く）

◎-is で終わる川の名前と都市の名前　　純粋 i 幹

◎次の女性名詞　　純粋 i 幹

turris,-is「塔」　febris,-is「熱」　puppis,-is「船尾」　secūris,-is「斧」　sitis,-is「渇き」

☆中性名詞

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が 1 つ　　子音幹

◎異数音節語で単数属格-is の前の子音が複数　　混合 i 幹

◎単数主格が-ar や-al や-e で終わる　　純粋 i 幹

第 4 変化

	男性・女性		中性	
	単数	複数	単数	複数
主格	-us	-ūs	-ū	-ua
属格	-ūs	-uum	-ūs	-uum
与格	-uī(-ū)	-ibus	-ū(-uī)	-ibus
対格	-um	-ūs	-ū	-ua
奪格	-ū	-ibus	-ū	-ibus
呼格	-us	-ūs	-ū	-ua

第 5 変化

	単数	複数
主格	-ēs	-ēs
属格	-eī ※	-ērum
与格	-eī ※	-ēbus
対格	-em	-ēs
奪格	-ē	-ēbus
呼格	-ēs	-ēs

※「単数属格が-eī の名詞」もあり、それらは単数与格が-eī となる（それ以外は同じ）。

＜形容詞＞

第 1・第 2 変化

(1)単数主格が-us,-a,-um で終わる形容詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-us	-a	-um
	属格	-ī	-ae	-ī
	与格	-ō	-ae	-ō
	対格	-um	-am	-um
	奪格	-ō	-ā	-ō
	呼格	-e	-a	-um
複数	主格	-ī	-ae	-a
	属格	-ōrum	-ārum	-ōrum
	与格	-īs	-īs	-īs
	対格	-ōs	-ās	-a
	奪格	-īs	-īs	-īs
	呼格	-ī	-ae	-a

(2)単数主格が-er,-era,-erum で終わる形容詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-er	-era	-erum
	属格	-erī	-erae	-erī
	与格	-erō	-erae	-erō
	対格	-erum	-eram	-erum
	奪格	-erō	-erā	-erō
	呼格	-er	-era	-erum
複数	主格	-erī	-erae	-era
	属格	-erōrum	-erārum	-erōrum
	与格	-erīs	-erīs	-erīs
	対格	-erōs	-erās	-era
	奪格	-erīs	-erīs	-erīs
	呼格	-erī	-erae	-era

※基本形が-er,-ra,-rum のものは、男性単数主格および男性単数呼格以外では-e-が落ちる。

第 3 変化

(1)「2 語尾型」

		男性	女性	中性
単数	主呼格	-is		-e
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		-e
	奪格	-ī		
複数	主呼格	-ēs		-ia
	属格	-ium		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia
	奪格	-ibus		

(2)「3 語尾型」

		男性	女性	中性
単数	主呼格	※	-is	-e
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		-e
	奪格	-ī		
複数	主呼格	-ēs		-ia
	属格	-ium		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia
	奪格	-ibus		

※-er で終わる。不活用部が変化するものがある。

(3)「1 語尾型」

		男性	女性	中性
単数	主格	※1		
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		※1
	奪格	-ī　※2		
	呼格	※1		
複数	主格	-ēs		-ia　※2
	属格	-ium　※2		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia　※2
	奪格	-ibus		
	呼格	-ēs		-ia　※2

※1　単数主格は 3 性とも共通だが、不規則である。単数呼格は 3 性とも単数主格に等しい。中性単数対格は、単数主格に等しい。

※2　単数奪格は-e になることがある。また複数属格・中性複数主格・中性複数対格・中性複数呼格は、-i-が落ちるときがある。これらは、「1 語尾型」が子音幹に由来していることによる。いくつか、必ずこうなる形容詞もある。

(4)動詞の現在能動分詞

		男性	女性	中性
単数	主格	※		
	属格	-is		
	与格	-ī		
	対格	-em		※
	奪格	-e (-ī)		
	呼格	※		
複数	主格	-ēs		-ia
	属格	-ium		
	与格	-ibus		
	対格	-ēs(-īs)		-ia
	奪格	-ibus		
	呼格	-ēs		-ia

※中性単数対格・3 性共通単数呼格は、3 性共通単数主格と等しい。

比較級

		男性	女性	中性
原級の男性単数属格		-ī または-is		
単数	主格	-ior		-ius
	属格	-iōris		
	与格	-iōrī		
	対格	-iōrem		-ius
	奪格	-iōre (-iōrī)		
	呼格	-ior		-ius
複数	主格	-iōrēs		-iōra
	属格	-iōrum		
	与格	-iōribus		
	対格	-iōrēs		-iōra
	奪格	-iōribus		
	呼格	-iōrēs		-iōra

＜代名詞・代名詞関連の形容詞＞

人称代名詞

	1 人称単数	2 人称単数	1 人称複数	2 人称複数
主格	ego ※	tū	nōs	vōs
属格	meī	tuī	nostrī nostrum	vestrī vestrum
与格	mihi ※	tibi ※	nōbīs	vōbīs
対格	mē	tē	nōs	vōs
奪格	mē	tē	nōbīs	vōbīs

※egō, mihī, tibī とも。

再帰代名詞

	1 人称単数	2 人称単数	3 人称	1 人称複数	2 人称複数
属格	meī	tuī	suī	nostrī nostrum	vestrī vestrum
与格	mihi ※1	tibi ※1	sibi ※1	nōbīs	vōbīs
対格	mē	tē	sē ※2	nōs	vōs
奪格	mē	tē	sē ※2	nōbīs	vōbīs

※1 mihī, tibī, sibī とも。

※2 強意のため sēsē とも。

関係代名詞・関係形容詞

		男性	女性	中性
単数	主格	quī	quae	quod
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quam	quod
	奪格	quō	quā	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

疑問代名詞

		男性	女性	中性
単数	主格	quis	quis	quid
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quem	quid
	奪格	quō	quō	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

疑問形容詞

		男性	女性	中性
単数	主格	quī	quae	quod
	属格	cūjus	cūjus	cūjus
	与格	cuī	cuī	cuī
	対格	quem	quam	quod
	奪格	quō	quā	quō
複数	主格	quī	quae	quae
	属格	quōrum	quārum	quōrum
	与格	quibus	quibus	quibus
	対格	quōs	quās	quae
	奪格	quibus	quibus	quibus

指示代名詞

hic, haec, hoc これ（指示代名詞）、この（指示形容詞）　・・・話し手に近いもの

		男性	女性	中性
単数	主格	hic	haec	hoc
	属格	hūjus	hūjus	hūjus
	与格	huīc	huīc	huīc
	対格	hunc	hanc	hoc
	奪格	hōc	hāc	hōc
複数	主格	hī	hae	haec
	属格	hōrum	hārum	hōrum
	与格	hīs	hīs	hīs
	対格	hōs	hās	haec
	奪格	hīs	hīs	hīs

iste, ista, istud それ（指示代名詞）、その（指示形容詞）　・・・聞き手に近いもの

		男性	女性	中性
単数	主格	iste	ista	istud
	属格	istīus	istīus	istīus
	与格	istī	istī	istī
	対格	istum	istam	istud
	奪格	istō	istā	istō
複数	主格	istī	istae	ista
	属格	istōrum	istārum	istōrum
	与格	istīs	istīs	istīs
	対格	istōs	istās	ista
	奪格	istīs	istīs	istīs

※単数属格の-īus は-ius と短いときもある。

ille, illa, illud あれ（指示代名詞）、あの（指示形容詞）　・・・遠いもの、有名なもの

		男性	女性	中性
単数	主格	ille	illa	illud
	属格	illīus	illīus	illīus
	与格	illī	illī	illī
	対格	illum	illam	illud
	奪格	illō	illā	illō
複数	主格	illī	illae	illa
	属格	illōrum	illārum	illōrum
	与格	illīs	illīs	illīs
	対格	illōs	illās	illa
	奪格	illīs	illīs	illīs

※単数属格の-īus は-ius と短いときもある。

is, ea, id それ（指示代名詞）、その（指示形容詞）　・・・話に既出のもの

		男性	女性	中性
単数	主格	is	ea	id
	属格	ējus	ējus	ējus
	与格	eī	eī	eī
	対格	eum	eam	id
	奪格	eō	eā	eō
複数	主格	eī, iī, ī	eae	ea
	属格	eōrum	eārum	eōrum
	与格	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs
	対格	eōs	eās	ea
	奪格	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs	eīs, iīs, īs

īdem, eadem, idem 同じもの（指示代名詞）、同じの（指示形容詞）

		男性	女性	中性
単数	主格	īdem	eadem	idem
	属格	ējusdem	ējusdem	ējusdem
	与格	eīdem	eīdem	eīdem
	対格	eundem	eandem	idem
	奪格	eōdem	eādem	eōdem
複数	主格	eīdem ※	eaedem	eadem
	属格	eōrundem	eārundem	eōrundem
	与格	eīsdem ※	eīsdem ※	eīsdem ※
	対格	eōsdem	eāsdem	eadem
	奪格	eīsdem ※	eīsdem ※	eīsdem ※

※eīdem は、iīdem や īdem とも。 eīsdem は、iīdem や īsdem とも。

強意代名詞

ipse, ipsa, ipsum それ自身

		男性	女性	中性
単数	主格	ipse	ipsa	ipsum
	属格	ipsīus	ipsīus	ipsīus
	与格	ipsī	ipsī	ipsī
	対格	ipsum	ipsam	ipsum
	奪格	ipsō	ipsā	ipsō
複数	主格	ipsī	ipsae	ipsa
	属格	ipsōrum	ipsārum	ipsōrum
	与格	ipsīs	ipsīs	ipsīs
	対格	ipsōs	ipsās	ipsa
	奪格	ipsīs	ipsīs	ipsīs

不定代名詞

「-quis-, -quis-, -quid-」型の不定代名詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-quis-	-quis- か -qua-	-quid-
	属格	-cūjus-	-cūjus-	-cūjus-
	与格	-cuī-	-cuī	-cuī-
	対格	-quem-	-quem-	-quid-
	奪格	-quō-	-quō-	-quō-
複数	主格	-quī-	-quae-	-quae- か -qua-
	属格	-quōrum-	-quārum-	-quōrum-
	与格	-quibus-	-quibus-	-quibus-
	対格	-quōs-	-quās-	-quae- か -qua-
	奪格	-quibus-	-quibus-	-quibus-

「-quī-, -quae-, -quid-」型の不定代名詞

		男性	女性	中性
単数	主格	-quī-	-quae-	-quid-
	属格	-cūjus-	-cūjus-	-cūjus-
	与格	-cuī-	-cuī-	-cuī-
	対格	-quem-	-quem-	-quid-
	奪格	-quō-	-quā-	-quō-
複数	主格	-quī-	-quae-	-quae-
	属格	-quōrum-	-quārum-	-quōrum-
	与格	-quibus-	-quibus-	-quibus-
	対格	-quōs-	-quās-	-quae-
	奪格	-quibus-	-quibus-	-quibus-

不定形容詞として用いる場合

		男性	女性	中性
単数	主格	-quī-	-quae- か -qua-	-quod-
	属格	-cūjus-	-cūjus-	-cūjus-
	与格	-cuī-	-cuī-	-cuī-
	対格	-quem-	-quam-	-quod-
	奪格	-quō-	-quā-	-quō-
複数	主格	-quī-	-quae-	-quae- か -qua-
	属格	-quōrum-	-quārum-	-quōrum-
	与格	-quibus-	-quibus-	-quibus-
	対格	-quōs-	-quās-	-quae- か -qua-
	奪格	-quibus-	-quibus-	-quibus-

※以上 3 つにおいて、活用部が-m-で終わり、その後ろに不活用部が続く場合の一部では、この-m-は-n-に変わる。

代名詞的形容詞

(1)単数主格が-us,-a,-um で終わる

		男性	女性	中性
単数	主格	-us	-a	-um
	属格	-īus	-īus	-īus
	与格	-ī	-ī	-ī
	対格	-um	-am	-um
	奪格	-ō	-ā	-ō
	呼格	-e	-a	-um
複数	主格	-ī	-ae	-a
	属格	-ōrum	-ārum	-ōrum
	与格	-īs	-īs	-īs
	対格	-ōs	-ās	-a
	奪格	-īs	-īs	-īs
	呼格	-ī	-ae	-a

(2)単数主格が-er,-era,-erum で終わる

		男性	女性	中性
単数	主格	-er	-era	-erum
	属格	-erīus	-erīus	-erīus
	与格	-erī	-erī	-erī
	対格	-erum	-eram	-erum
	奪格	-erō	-erā	-erō
	呼格	-er	-era	-erum
複数	主格	-erī	-erae	-era
	属格	-erōrum	-erārum	-erōrum
	与格	-erīs	-erīs	-erīs
	対格	-erōs	-erās	-era
	奪格	-erīs	-erīs	-erīs
	呼格	-erī	-erae	-era

※基本形が「-er,-ra,-rum」のものは、男性単数主格および男性単数呼格以外で、上表の-e-を取ればよい。

(3)alius,-a,-ud（例外）

		男性	女性	中性
単数	主格	alius	alia	aliud
	属格	alīus	alīus	alīus
	与格	aliī	aliī	aliī
	対格	alium	aliam	aliud
	奪格	aliō	aliā	aliō
	呼格	alie	alia	aliud
複数		(1)に同じ		

※alius,-a,-ud の単数属格 alīus は実際にはまれで、alter,-era,-erum の単数属格 alterīus で代用される。

基数詞（1～3）

ūnus,-a,-um　「1 つの」　（代名詞的形容詞）

		男性	女性	中性
単数	主格	ūnus	ūna	ūnum
	属格	ūnīus	ūnīus	ūnīus
	与格	ūnī	ūnī	ūnī
	対格	ūnum	ūnam	ūnum
	奪格	ūnō	ūnā	ūnō
	呼格	ūne	ūna	ūnum

duo,-ae,-o　「2 つの」

		男性	女性	中性
複数	主格	duo	duae	duo
	属格	duōrum	duārum	duōrum
	与格	duōbus	duābus	duōbus
	対格	duōs(duo)	duās	duo
	奪格	duōbus	duābus	duōbus
	呼格	duo	duae	duo

trēs,trēs,tria　「3 つの」

		男性	女性	中性
複数	主格	trēs	trēs	tria
	属格	trium	trium	trium
	与格	tribus	tribus	tribus
	対格	trēs, trīs	trēs, trīs	tria
	奪格	tribus	tribus	tribus
	呼格	trēs	trēs	tria

＜動詞＞（規則変化動詞のみ）

基本形

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現能 1 単	-ō	-eō	-ō	-iō	-iō
不現能	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre
直現完能 1 単	-ī				
スピーヌム対格	-um				

デーポーネンティアの基本形

	第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用
直現受 1 単	-or	-eor	-or	-ior	-ior
不現受	-ārī	-ērī	-ī	-ī	-īrī
直現完受 1 単	-us sum				

※通常の基本形の「直現完能 1 単」は「完了グループ」の活用形を導くために用いられるが、デーポーネンティアの基本形の「直現完受 1 単」は「スピーヌムグループ」の活用形を導くために用いられる。

直説法・能動態

			第 1 活用	第 2 活用	第 3 活用	第 3 活用 b	第 4 活用	
現在	単数	1 人称	-ō	-eō	-ō	-iō	-iō	現在グループ
		2 人称	-ās	-ēs	-is	-is	-īs	
		3 人称	-at	-et	-it	-it	-it	
	複数	1 人称	-āmus	-ēmus	-imus	-imus	-īmus	
		2 人称	-ātis	-ētis	-itis	-itis	-ītis	
		3 人称	-ant	-ent	-unt	-iunt	-iunt	
過去	単数	1 人称	-ābam	-ēbam	-ēbam	-iēbam	-iēbam	
		2 人称	-ābās	-ēbās	-ēbās	-iēbās	-iēbās	
		3 人称	-ābat	-ēbat	-ēbat	-iēbat	-iēbat	
	複数	1 人称	-ābāmus	-ēbāmus	-ēbāmus	-iēbāmus	-iēbāmus	
		2 人称	-ābātis	-ēbātis	-ēbātis	-iēbātis	-iēbātis	
		3 人称	-ābant	-ēbant	-ēbant	-iēbant	-iēbant	
未来	単数	1 人称	-ābō	-ēbō	-am	-iam	-iam	
		2 人称	-ābis	-ēbis	-ēs	-iēs	-iēs	
		3 人称	-ābit	-ēbit	-et	-iet	-iet	
	複数	1 人称	-ābimus	-ēbimus	-ēmus	-iēmus	-iēmus	
		2 人称	-ābitis	-ēbitis	-ētis	-iētis	-iētis	
		3 人称	-ābunt	-ēbunt	-ent	-ient	-ient	
現在完了	単数	1 人称	-ī					完了グループ
		2 人称	-istī					
		3 人称	-it					
	複数	1 人称	-imus					
		2 人称	-istis					
		3 人称	-ērunt					
過去完了	単数	1 人称	-eram					
		2 人称	-erās					
		3 人称	-erat					
	複数	1 人称	-erāmus					
		2 人称	-erātis					
		3 人称	-erant					
未来完了	単数	1 人称	-erō					
		2 人称	-eris					
		3 人称	-erit					
	複数	1 人称	-erimus					
		2 人称	-eritis					
		3 人称	-erint					

直説法・受動態

現在	単数	1 人称	-or	-eor	-or	-ior	-ior	現在グループ
		2 人称	-āris	-ēris	-eris	-eris	-īris	
		3 人称	-ātur	-ētur	-itur	-itur	-ītur	
	複数	1 人称	-āmur	-ēmur	-imur	-imur	-īmur	
		2 人称	-āminī	-ēminī	-iminī	-iminī	-īminī	
		3 人称	-antur	-entur	-untur	-iuntur	-iuntur	
過去	単数	1 人称	-ābar	-ēbar	-ēbar	-iēbar	-iēbar	
		2 人称	-ābāris	-ēbāris	-ēbāris	-iēbāris	-iēbāris	
		3 人称	-ābātur	-ēbātur	-ēbātur	-iēbātur	-iēbātur	
	複数	1 人称	-ābāmur	-ēbāmur	-ēbāmur	-iēbāmur	-iēbāmur	
		2 人称	-ābāminī	-ēbāminī	-ēbāminī	-iēbāminī	-iēbāminī	
		3 人称	-ābantur	-ēbantur	-ēbantur	-iēbantur	-iēbantur	
未来	単数	1 人称	-ābor	-ēbor	-ar	-iar	-iar	
		2 人称	-āberis	-ēberis	-ēris	-iēris	-iēris	
		3 人称	-ābitur	-ēbitur	-ētur	-iētur	-iētur	
	複数	1 人称	-ābimur	-ēbimur	-ēmur	-iēmur	-iēmur	
		2 人称	-ābiminī	-ēbiminī	-ēminī	-iēminī	-iēminī	
		3 人称	-ābuntur	-ēbuntur	-entur	-ientur	-ientur	
現在完了			完了受動分詞＋sum（直説法現在能動態）					回説方式
過去完了			完了受動分詞＋sum（直説法過去能動態）					
未来完了			完了受動分詞＋sum（直説法未来能動態）					

接続法・能動態

現在	単数	1 人称	-em	-eam	-am	-iam	-iam	現在グループ
		2 人称	-ēs	-eās	-ās	-iās	-iās	
		3 人称	-et	-eat	-at	-iat	-iat	
	複数	1 人称	-ēmus	-eāmus	-āmus	-iāmus	-iāmus	
		2 人称	-ētis	-eātis	-ātis	-iātis	-iātis	
		3 人称	-ent	-eant	-ant	-iant	-iant	
過去	単数	1 人称	-ārem	-ērem	-erem	-erem	-īrem	
		2 人称	-ārēs	-ērēs	-erēs	-erēs	-īrēs	
		3 人称	-āret	-ēret	-eret	-eret	-īret	
	複数	1 人称	-ārēmus	-ērēmus	-erēmus	-erēmus	-īrēmus	
		2 人称	-ārētis	-ērētis	-erētis	-erētis	-īrētis	
		3 人称	-ārent	-ērent	-erent	-erent	-īrent	
現在完了	単数	1 人称	-erim					完了グループ
		2 人称	-eris					
		3 人称	-erit					
	複数	1 人称	-erimus					
		2 人称	-eritis					
		3 人称	-erint					
過去完了	単数	1 人称	-issem					
		2 人称	-issēs					
		3 人称	-isset					
	複数	1 人称	-issēmus					
		2 人称	-issētis					
		3 人称	-issent					

接続法・受動態

現在	単数	1 人称	-er	-ear	-ar	-iar	-iar	現在グループ
		2 人称	-ēris	-eāris	-āris	-iāris	-iāris	
		3 人称	-ētur	-eātur	-ātur	-iātur	-iātur	
	複数	1 人称	-ēmur	-eāmur	-āmur	-iāmur	-iāmur	
		2 人称	-ēminī	-eāminī	-āminī	-iāminī	-iāminī	
		3 人称	-entur	-eantur	-antur	-iantur	-iantur	
過去	単数	1 人称	-ārer	-ērer	-erer	-erer	-īrer	
		2 人称	-ārēris	-ērēris	-erēris	-erēris	-īrēris	
		3 人称	-ārētur	-ērētur	-erētur	-erētur	-īrētur	
	複数	1 人称	-ārēmur	-ērēmur	-erēmur	-erēmur	-īrēmur	
		2 人称	-ārēminī	-ērēminī	-erēminī	-erēminī	-īrēminī	
		3 人称	-ārentur	-ērentur	-erentur	-erentur	-īrentur	
現在完了			完了受動分詞＋sum（接続法現在能動態）					回説
過去完了			完了受動分詞＋sum（接続法過去能動態）					

命令法・能動態

現在	単	2 人称	-ā	-ē	-e	-e	-ī	現在グループ
	複	2 人称	-āte	-ēte	-ite	-ite	-īte	
未来	単数	2 人称	-ātō	-ētō	-itō	-itō	-ītō	
		3 人称	-ātō	-ētō	-itō	-itō	-ītō	
	複数	2 人称	-ātōte	-ētōte	-itōte	-itōte	-ītōte	
		3 人称	-antō	-entō	-untō	-iuntō	-iuntō	

命令法・受動態

現在	単	2 人称	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre	現在グループ
	複	2 人称	-āminī	-ēminī	-iminī	-iminī	-īminī	
未来	単数	2 人称	-ātor	-ētor	-itor	-itor	-ītor	
		3 人称	-ātor	-ētor	-itor	-itor	-ītor	
	複数	2 人称						
		3 人称	-antor	-entor	-untor	-iuntor	-iuntor	

不定法

現在	能動態	-āre	-ēre	-ere	-ere	-īre	現在
	受動態	-ārī	-ērī	-ī	-ī	-īrī	
未来	能動態	未来能動分詞+esse					回説
	受動態	スピーヌム対格+īrī					
現完	能動態	-isse					完
	受動態	完了受動分詞+esse					回

現在能動分詞

3 性単数主格	-āns	-ēns	-ēns	-iēns	-iēns	現在
3 性単数属格	-antis	-entis	-entis	-ientis	-ientis	

※残りの変化形は、＜形容詞＞の「第 3 変化」の「(4)動詞の現在能動分詞」を参照のこと。

完了受動分詞　（他の数・格も第 1・第 2 変化）

男性単数主格	-us	スピー
女性単数主格	-a	
中性単数主格	-um	

未来能動分詞　（他の数・格も第 1・第 2 変化）

男性単数主格	-ūrus	スピー
女性単数主格	-ūra	
中性単数主格	-ūrum	

動名詞

属格	-andī	-endī	-endī	-iendī	-iendī	現在
与格	-andō	-endō	-endō	-iendō	-iendō	
対格	-andum	-endum	-endum	-iendum	-iendum	
奪格	-andō	-endō	-endō	-iendō	-iendō	

動形容詞　（他の数・格も第 1・第 2 変化）

男性単数主格	-andus	-endus	-endus	-iendus	-iendus	現在
女性単数主格	-anda	-enda	-enda	-ienda	-ienda	
中性単数主格	-andum	-endum	-endum	-iendum	-iendum	

スピーヌム

対格	-um	スピ
奪格	-ū	

IX-viii **あとがき**

本書を読み終えた後、どうするか。本書は「ラテン語の文法を俯瞰し、（ちゃんとした）文法書をスムーズに読めるようにすること」を目的として書かれたものである。

ラテン語の学習を始めようという気になった人がいたら、きちんとした文法入門書を用意して、じっくりとやっていくことをおすすめする。例文などにふれながら、そして変化・活用表を本気で暗記しながら学習していくと、より短時間で覚えられる。なあなあでやっていると、いつまでもなあなあになってなかなか覚えられない。文法書は書店で買うのもよいが、とりあえず大きめの図書館に行けば置いてある（日本十進分類法では 892）ので、しばらくは借りたりして様子を見て、気に入ったのがあったら買えばよいと思う。文法を知らないうちに文法書を買おうと思っても、どれが分かりやすい便利な文法書なのかを選べない。ある程度知識を持ってから買うようにした方がよいと思う（なんせ高いので）。一般的な書店での品揃えはそれほどよくないので、注文という形になるかもしれない。最近はラテン語に関するウェブサイトもたくさんあるのでそれらを利用するのもよいかもしれないが、紙のものの方が使いやすくて情報量が多いと思う。

他の文法書を買わなくても、いちおう本書の内容だけで簡単な文の和訳に必要な情報が揃うようにはしたはずである（ただし、別途辞書は必要）。ただ、ラテン語の文の和訳は、（知識も必要ではあるが）「慣れ」が必要である。多くの文を訳すことによってうまく訳せるようになっていくので、そこは練習あるのみである（基本的に練習問題は文法書についている。あるいは文例集なども市販されている）。

本書を読んだけれどもこれ以上勉強する気はない、という人は特にこれ以上勉強はしなくてもよいと思う。語学的には結局なにも喋れるようになっていないと思うかもしれないが、結局のところ喋れるようになったところで喋る機会などないのだから、別にいいのだ。「こういう言語がある」ということを概念的に理解するだけでも大きい。のちにフランス語やイタリア語やスペイン語を学ぶ機会があれば、なおさら役に立つことだろう。

より多くの人にラテン語に親しんでもらえるよう、願っている。

ラテン語文法　鳥瞰図
（配布版）

平成 25 年 10 月 30 日　初版発行
平成 26 年　1 月 16 日　改訂二版発行

NDC 892